



NOTE BOOK

---

寺田寅彦先生  
語錄

---

宇田道隆

大正十四年

一月十六日

夜七時半訪問 先生の初印象は

寂しい、暗梅は静かな、皺に満ちた方。

学習上の事を話さる。

教科書を頼るな、自ら確信に調べ進め、

語学は著しい、ハンゲイキヤツコをつける、

自分はネイティブを二尋み本校の時からとつて居る

小学生に講演するのは大っかしい、

概念を辞書に捉へること、根本をどかす

ではない。学問に成功するのは頭の良し悪し

ではない。学問を熱愛する人である

今の中にもうんと勉強しなさい、何ぞし好きな事

をやれ。頭の転換には音楽や絵画を通

して無私の境にはいるのがよい。

宇宙には研究するものが多いが余り多くて弱める。

学習

この先生の

言葉に

勵まされ

て

学究生活

に引きこ

み

二の手

になつた。

十四年十二月

余り太いことをせうとしては、一生やつても出来ま

せん、そんな根本問題を一ぱにやつてつ

たら、気多分、勉学者は、飯加(飯へちやくちやう)

ます、しかしやつぱり飯をくつる。余り

欲心張るはいけない。まとめるのが一つの練習。

其術をつてあかぬは、いつか下つてもまよりまらません。

ととも観論式でつけぬのが実論では  
ニラスラ〜とける

大正十五年

一月廿一日

セドライトの実験

(理学部本館地下室)

「貫眼」をやるのは「注意」する癖をけ

キープする眼にする所がある

ワソクの炎の照らし方でバーニアの読みが変つて  
出る。副尺の読みの合つて所数をある事に  
明盲の訓練されれば目に感しあはし目玉が  
適応する其の微妙な喰ひ違ひを発見する。  
二所感覚上あふと見なら中間の位をとりまじ  
石の台でししよつと動いて居る。いんちものも  
不変でありまん。絶へず確かめなさい。  
物は見て高しこめん。これに確かとするのみすし。

四月廿一日

池上先生と夜

寺田先生を訪問、中谷先生即ち教を語る。

「私は父も禿げなるか此の通り禿げず却つて  
口数は増上ししかし、取巻は余程薄くすまじよ  
未練らしく髪を横に撫びつけ居る人が  
あるがあれなど矢張、少年は皆矢張をいせ居る  
学校の成績は金米糖の角をつつまなす  
やうなもので、アーヒラリーのものです。  
教育は寺小屋式かよい。お茶でものんで  
のんきに談笑の中に入る。そして君此外に遊ぶべし  
絵へと指針し居る。  
大学を出る位の才能を持ちながらやれな、金あるのは  
残念だ。やればさつとえらくなる。

えらくなるならぬは其人の気持次第。

図書室の古い雑誌などひねくつて居ると

何かしらこれか 識域の下の残つて居てひよと上面上昇する

識域下の智識は大変大切である。

一ぺん習った 講義の印象も同じです。

口答試問をゆると実力が一番はつきり判る。

オリヂナルな考へ方をする人が分る。

二つのネゲで二本釣りを調整する 気持は、ピュッ

と一方を一方へ飛ぶのを まく抑へる 気持は丁度

金突で魚を捕り、玉突で毛を揮ふと同じ

気持で、実験が上手になると大妻面白い、

俺もなかつたつて 駄目と思はないで俺でもやる

と云ふ気持を持つこと。

私は自分のするべき 歡的に致しやるるか否か

を考えて。ハア今俺は今怒つて居るなと思ふ

様な場合に。私は今四十九才、明治十年生れ。

自分でやらなくちや駄目、混沌から系統立つて

一つの道を求めて行く努力が必要だ。漫然

と見るのぢやありません。

掛谷宗一君の偉かたたるは一つ話にウツて居る。

一なし出席せぬから 産めこやろと口答試問をした

かふつと横向にソリヤ、と やつて見ると

当然だと 疑も遠くをかつた。

私のやるべきもの

物理学

本を讀むのに essence を掴む事、本を捲うて  
行つて 此処だと思ふ事をバツと致に込めず事。  
お菓子でも喰ひながら授業したい。

努力しなれどやる事

学校、教場がやるだけの幽子にたく常住  
座臥 学問と一つになる事、生活と切り  
離しては成り立たない御飯を喰べ乍ら 其の  
味は どうして其を行なかつたか あと考へて  
見る。 アイシシユタインは実験では セ落第する  
アストン、フレイ、ラザフォードは坂井先生の後継者 運 運命

人によりこんなにも適、不適があります。

完全弾性を示すも 完全可逆なものも Nature  
にない。自然はそんな風なものがある。

現らく何時の時代でも材料の山積や分科  
の多岐を歎いて居た事であろう。しかし私は  
きつと物理全体を纏めて 掴む事 が出来る  
と思つて居ます。

どの小段も全く大科学者たる素朴質を持ち  
現代の物理学の昔も痛い弱点を直ちに  
抜き其処を突込む。ニートンの第二法則とは何かと  
云ふと早や分らない。  $f = \frac{kmv}{r^2}$  力は元素筋肉から

定義す可きもの、それから再び元に戻るべきものを  
マツハ流の解釈通り経験と悟性のみが本当です。





自然を征服せうとするとえらい目にあひますよ、  
しつと自然を尊重して観察して研究の材料  
を増やさぬといけません。そんな所に宇宙物理地球物  
理、海洋学、地層学が、淺論初多しと決しかゆる原因  
が宿つて居るごせう。

ポテンシャルはしと重力の問題から出たのが電磁  
やあらゆる方面に利用出来る様になる。物理の事柄  
は意外な<sup>りとも</sup>交<sup>り</sup>をもつて居る。

海の色をどしつと研究すると面白い。船に酔はぬが  
沖に出て呼吸スベクスの研究などは、たれしやつた人は  
ないが面白い結果を得るごせう。

何せ前人のやらぬ事をやるのは、<sup>たつ</sup>つかしいがかし  
やり甲斐のある事が、僕はこれに<sup>たつ</sup>たつ死れるのは  
本望だと思つて居る。

オゾンが海浜に多かつて、そんな事は<sup>どう</sup>嘘ごせう。  
嘘ぢやありませんか。此系外線のゆゑに出来るといふのも  
怪しいらしい。虫送りの鏡<sup>カイン</sup>く、太鼓<sup>ゴーン</sup>く、

耳をすえ相ごと云ふと先生笑つて、随分遠くからう  
太鼓を打つお果しみがやつて来るらしい。一種の  
に<sup>たつ</sup>たつて居るのですね。僕等のはやらん物理など

の<sup>たつ</sup>たつ向をやるのも虫送りの<sup>たつ</sup>たつたつみ<sup>たつ</sup>たつなしの  
ごせう。自分には愉快ごたまらん。虫が<sup>たつ</sup>たつ  
ごませうかねと向ふとよあ分らん、虫の<sup>たつ</sup>たつ官<sup>たつ</sup>たつ膜ご

先生も私も  
海洋光学

に<sup>たつ</sup>たつ心<sup>たつ</sup>たつが  
あつた、  
遂に<sup>たつ</sup>たつ現<sup>たつ</sup>たつし  
なかつた。

日本  
世界  
Jenlov  
Tyler

海中写真、映画  
水中テレビ

エレクトロニクス  
カメラ

証のあらゆる（モロト）ン中に共鳴一するとのか

あふら 落ちまの知らん。そんな事はどうもして

か僕等年寄りに雑用をけうれるはたまらない

新進有為の人が沢山いるに自由に研究せよ世をた

か無理に扱すよと逃げぬをいしてあます。

十年前妻の骨をうめに来たかつて来るのは大抵

骨埋め、今はは僕の骨、お墓は久万山に。

学問は興味をいつてかうねば駄目です。

君の兵役は、身体が丈夫なら、一年の上から

見れば損にならぬいせう。

近頃は量子論やスベクなど皆夢の中に

やるが僕は尻馬に乗つて事を成すのは考へ物だ

と思ふ。ハイゼンベルクを凌駕するのはムシかしいから。

實際他の方面に研究すべき事かたかといふに

澤山分らない事がある。

僕は講義ばかりし好きません。少しの人をいっ

が余り大勢聞かずに来て話すのは性に合はない。

厭々やつて居る。前に一般物理を大講堂で

やつたが工科の人達聞かずに来て満足で、音が似て

いつし観前列を争ひ合つたと云ふ話を聞かぬ

の毒に思つた。地は物理、気象の講義もまた

仲には随分講義の好きな方も有りますかね。

コロキウムの時のかうに吞氣にやれると良い。

八月三日

筆記されるのはどうも厭だ。固苦しい講義の様子の  
排列しなれば気鬱し云へる。今なせる確率  
現象の講義は準備しなまか。F.W.に大伴従つあります。  
何し別に用事を携ふに決つて居るまよどいだけぐしくいふれぬ。

銀河の細かき構造はとてし。東京にははるまじ。

先生の郷家族し星を足らから涼んじ居る。時半。  
「人の真似ばかりするのは厭だから何か変つたるせぬは。  
こうすると面白いにぶつかぬと限らぬ。実験も理論  
とか。寂然とした差別のあるわけは有りませぬ。」

夜 島崎爲道君と訪問。(朝倉村)

「銀河が良く見えますね、白く雲の様さ。」

立体的な感じを持たせます。

物理殊に地球物理を含むものの中、教科書の一頁  
をあけてほんに分つた所があります。何と分る居る、

一体数学と物理学との関係も問題は余程考慮  
相されぬばなま。重大な問題で認識論と交渉

がある。波の運動など見こみ分り切つて居る、

微分方程式の解は之と云はそれだけだが、実際の

自然で見る波は仲々分りつこまぬ。空を大にとて

七トロイタルでない。それに近いが違ふ。又楕円軌

道を各微分が正確に追跡せぬ。何か別な考へを

要するらしい。うゝの本は数学の書としは立派だが、

Nature の複雑な現象は数学では手に念はぬ。

粘性 液体 トロイド 波  
Viscous fluid の trochoidal wave を  
考へれば面白い。

渦などし、大陸、分らぬもの一つ。

渦輪の交互作用など、成つて居るか

一つの渦の構成され方などは分りません。

分子迄渦を見に行けばもうありません。

原子中のものはむづかしく仲々、数学者達の手に

合ふものはない。分子渦を考へた人になければ何か

何かが合いません。

海に油を注げば波の収まる譯も分らぬ。

風が吹きまわれば其の跡へ波の来る譯も分らぬ。

漢師、船乗り、欲求ばかりする、理屈屋、

学者は空で計算ばかりする、欲求はちつとせぬ。

大地震があろうと、今村君と云ふ方が、気味悪く

い、地震が此間でも来るものなと云ふと、さうあつたか

気象台は其処をよけず発表した。多岐。

上野の美術展に行つたが、臆病な僕が平気

で初期微動の経緯を揺り直して見ると、半分主

要動は成つたよ、と時間測つて見ると、其の差は

下足番の盛ると云ふキリにならぬ。コトホコ、

吹いて来た。電車を待つて、大停電かと思つた

根津で倒れた、家屋を、路、ちやうど知つた



地震

地球の  
地殻



果山

震災当時長男三平を危く死ぬ所を助す。平の

たう錦糸町の学校(専)被服廠にまかして

せう。学校の連中は法文の印上から火の手を

りた申、百ちか(は)僕も校舎から逃げる暇もな

東京には三三三三輝、ツルネリシ、神輝、龍輝、龍輝、龍輝

海溝の成因分る。日本列島の地震

地層学者の大喧嘩、地質学の上何年といふやを

数字は信用しません。私はもう随分小さい時から虫採りが好きでした。玉

虫、甲虫、など、蝶々、蜻蛉はアイヌみたいなの保護の要るものです。

崖の下の監獄の横(百五橋元)此処が昔塚で大層

居た(藩政時代の地回)を持ち出しとられ説明す。

紋白蝶のみた、そののたつたらしい。

孕湾のうらうの島のうらなは古い、侵蝕のちから年代が決定出来る。

自転の原因、カントラプラスの星雲説をせう。

太陽の自転週期の赤道、南北が違ふこと其の

ひねられエ合、地球の自転週期一定なる事か

より自然です。磁尺で自転することは初耳す。

自転する為に磁性を帯びるといふ説がある。

新星が問題なる。二重衝突の確率計算もつた人

があまりよ。地球物理などの問題一番大喧嘩か

ひ易い。高知の友人が地球が扁平といふに附してまたんか

ある、気狂が多い。物理学史を教授する必要がある。

私の一般物理学にはマッハ、カッパ、等々大分入れた。



横波  
三里

昔あつて今なきのち華錢、竹筒入水羊羹、  
冊乾皮、肉桂、肉桂酒...

目景色を見る時は物理学者になつてゐるが常  
能くだが、それは研究室内だけの物理学者だからだ。

「横波三里は横波へ三里と云ふ意味です」と傍のオヤを  
かそう云ふと先生は銀鎖を曲けて地図を測つて「三里  
半、云ふす、宇佐灣」口から見れば三里せう。

少し位鎖の延びるのは我慢して世間はねはならない。  
横波三里の景色は和平、穏、安、静と云ふ感じ  
包まれて居る。しかし変化に乏しいと思ふ。いと思ふ。



地圖

今日の実測の結果 *Contours* の不思議な一致を見た。  
須崎の野見半島の断崖が太平洋に向つた側  
にあると見て若し元が同じで対称的として一年に削り取ら  
れる度合を假定すれば今迄の経過時間か分ると思ふ。  
陸地測量部の昔々、杖に一寸廻りくどい様な手  
敷を繰返すと云ふ念の入つたもの。大抵の凸凹も良く  
合つて居る。土佐の土地の名には奇妙が解し行な、  
細いのが凸凹など云ふ所ある。目ノクソは目蓋が  
らいの意味。

八月三日補遺

僕をへか、懐かしく思ふ。自分か氣をつけ居る事、他はま  
らぬ。自分か問題を持ち、関心事を常に持つて居る事か、  
大切だ。書物はそれに向つて利用されるから。  
ジビターですか、潮江山の上に見えて居たのは、僕は又

九月廿八日

十月十日

十月廿五日

提灯かと思つて小供に云つたらあれは悪たよと云はれた。  
しかし赤いのは地平線に近いので太極氣の白きのをとすめなう。

物理も百年たてば随分変わる。はた十年どうんと  
変わる。物理は若しも解り切るならばつまらぬ。

ゆくと僕も僕もやる気はせぬ。職業として教へるには良し知れぬ。

ヤマ(天晴蛇)が <sup>多</sup>此方に卵をみだりに集つて居た。

地震学の新しい見地か見出し古い地震学的構造を

傳説等を採るのは面白い。(横濱重をある長男と)

築山など貝の附着が昔今との潮着を知らうとした  
かとも分る程新しいものを多くあるもの有史以前らしい。

後期学生の貝学場所を黒板を書き並ぶのを見て

先生曰「<sup>アノ</sup>プロダクシヤや帝劇はどうです。風を起す

雷の音をどさせる装置を見え来ると好い。僕もベルリ

で劇物(見へてよ)

講義中の銀座を通る人の校計やつて重キネマの

スターが通ると目がお留守になる。築鴨の監獄

に這入る人の消長は社会と云ふ人の胸の中が要する

を要するといふ要素の枚の生枚枚を意味する。まづ面白い

結果が出来ます。心子校を欠席する人の枚の消長も面白い

情けるのし一つの病気がすから」

講義「誰でもするあやまちだが、大きいと云つたと云うて

小さいと云つて居たり黒板を書き、おぼへたりするところがある

から許して下さい。しかし本も知らなう。ミスプリントがある。

海相

十二

十二

生人

十二

時計の遅れ進みを敬測するとこれが結露がガラスの曲線にある。そしてシャープな程文化の進めるのが本郷あり

十二月九日

にふぶると物理学的には余程平らである。講義「統計的統計の見え居ると何々のの性質はあはれとまをせん。總理大臣が通つて居るも知れなきが、皆一つの粒子とと取扱はれて居るもの家をいふ大きな所を見えて居る人はこれを構成する人間、民族の性質は分りません。私達は誰も電子の顔を見えて来たものはまはサフモクトロンなどいふふんもある(エリシヤを)電子なんかは片輪者が居るかも知れません

生命

十二月五日

私達の敬つ居るのはみんなこれらの統計的な結果です。これらの効果です。生命などいふものも二元論一元論とか色々ありませが物理学者は矢張物理的に考へて行きたい。何か物と生命との橋渡しに居るかと思ふのか問題です。私は原子や電子などが生命を持つて居ると考へればいふと思ふ。

十二月廿日

海気 相互 作用

「解析して他のものを打ち消されだけ引き出す様につとめよ。石垣の倒、小さい残子、残子、同題、起源は日本海へは降りついでるや(漏)は起源、まが太平洋の海気、大隈、時、か、

海気、相互、作用、起源、大隈、時、か、

昭和二年

一月十日

講義

「今日は私の一番厭な所が下流まで  
 して来たかつた。熱心力学ののうら、分りに、まの  
 はなりの物理学者に一番評判が悪い。  
 ホルツマンはえらい人です。私の見る所では確率  
 の概念を分るに結びつけて物理的量を統計  
 的平均から見出したるが物理学史上特筆すべき  
 大事件だと思ひます。私は前に旧館の地下座の廊  
 下全体を利用して来るたせつてUライマンから出さ  
 れる光の小部分をとつて其の表面から出る光量の  
 変動を見せよとしたるがある。しかしフーコーの  
 迴轉鏡を使つてかつて既とこいもレンズの面も変動  
 かつた。空気のゆがが随分大きな空気の流の変  
 動がある。始末、実測したものは之等の重つたもの  
 故より分るに色々の強さを試験すればよがとてこ  
 面倒に行かぬ。其中他に面白い事がある。その  
 あの廊下全長位の真空管ではさきと来るまで  
 「字を映はきむ。寒い」といふ病人がくうつるの。麻  
 痺は病人だけだ。自画像でも出さうか。僕には  
 三つ、三つがある。一つは、サハ君の本の一つは大分生  
 一つは、留學中とつたカイセル野馬の  
 寺田にもえな若いをりかあるかとびつりせう。

二月廿三日

昭和二年  
四月

三、の激

水

水講

就職決定報告

著の研究者への教え

昭和四年  
四月三日

午後八時 先生宅(訪問)

「学校の教授をやめたのはお十になつたし、健康の左右  
やあれやこれと時機が丁度熟したと思ふから、教授は  
どうして性に合はない。研究所も廻ると腹工合がよい。  
大学を出て五年、自、はじめの年は大学段で、地展  
予防病查の嘱託、講師、一年生のお相手、あの時分は  
若かつた。本多先生に港海遊りした。(三四郎の)

漱石  
の  
エッセ

野々宮先生の福種漬は夏目先生が何か、種は赤か  
と貝にまじると、僕は大河内正敏君と鉄砲君の字真  
撮りの実験と居ながらこれを書かれると困る。おれは法  
いたニヤラスの光井実験の話をした。寒月、の人物の変  
たのは僕がモロが云つた事、張しよ。バウオリは其の儘、  
ま長崎屋へすつぽりマトかぶつて置たさう。しかしまだ目か  
きして居るか、キヤート云ふ者、なびつりして、野先生などは誇張  
です。蛙の目玉での紫外線、反射、團栗のヌメリキ  
の種、首釣りの力、僕は僕がフイロゴにあるを教へてあげ  
てやまつ。釣合の力の式など、田内先生は大夏先生  
水存の方、研究は、田内先生は大夏先生  
な研究が外人が知つたら、田内先生は大夏先生  
集果燈の効果、田内先生は大夏先生  
忠実にニはらずに、田内先生は大夏先生  
何んもなぬなど、田内先生は大夏先生  
ぬなど、と云ふものはない。どんなものでも面白い。

つまりめと云ふのはつまる様に出来ない人の云ふ。

尤位の才気や学問は忠実に根気よくやる人は  
かなひませぬ。忠と愚です。食事の時も便所

電車でも絶えず考へるやうに。問題を持ち手に  
本を讀んでも左から左の耳へ素通りします。

~~本~~ Beridge Abstract

は一時向位を目を通して自分に関係  
のある所をみつけて読む。文献はまとめる時の  
参考にする位にとこれに二でわらぬ様に。

本多きが僕に教へて呉れた。考九分本流計一分  
が其の秘訣。idea を受けぬ様な本は駄目、  
本から受ける idea は大変尊いから大切にしまつておきなさい。

後にこれをおひあしし人の氣づかぬ所に気がつく。

古典でも有名なえう、上のよみなき。殊に  
Papers は、例へば Belvin の Baltimore Lectures、Natural Phil. Maxwell のもの。Rayleigh Works

僕は Plank's Wärme strahlung は四、五回讀みました。

Sound は理論物理の大切なきです。  
あぼえる熱に讀むのは本がない。

面白くやり給へ。さつと人は棄棄して置きます。

何時の間にか良、所へ行けませぬ。僕はもうすつかり  
立身出陣も世間的欲望から離れた。

悟つて来た。もうイン研究をするだけが果てなき。  
ウイオリシと線香と何処か関係があるかと一口に

歟せるのはスベリリストびそん人は何しても出来ませぬ。

考をズズンデ<sup>展開</sup>するには中々実に現在持  
つて居る問題を付ける事です。

同じ題目を扱ふ人があつても其の扱ふ要りま  
考へは一部<sup>の</sup>も他はどしどしあつて来ます。

吾人は知り得ない様です。僕も江戸の素  
土佐人の血を言はせると見えやけりてんが  
田丸先生はあんなううぢすや。万子お任せし  
たといふは俺に王冠をいと思つてあちか  
様。大妻坂。昔は原君は仲りあつた  
考へのあるが、よく引張つて世をつたう  
論又の書ろ、方法めづい所を見抜く。

流行を逐つて居るは何も名乗ぬ。是も子カよ、波動  
力、廿二居る目には外も人の樽物はかり  
の人はオリカんの事を考へば馬目です。

又献を多くつけるのは独このドクン論又の特徴。  
数学にしろ物理にしろ其の問題を考へるに要る  
かけを調べ行く。こゝろをい、残さぬ。

武蔵の名人は金剛障問がけで障が  
虎並の坦懐でいんを問題でもハッ  
る自身。自分の不得手なるはこゝろを  
僕は数学は臨分かつたが今は詳めん  
数学の界中、得意を人にマカせてある

ア、いんを考へず、いんを本に  
いんを考へず、いんを本に

いんを考へず、いんを本に

いんを考へず、いんを本に

いんを考へず、いんを本に

いんを考へず、いんを本に

いんを考へず、いんを本に

四月十七日

Physicist

たる事がオデです。線香、燃やしても Physics だ。

唯線香以外には何も知らず。線香の事に他が

口を出す。目を刺く様な Speculation は、けなさい。

卒業しからはたつ場、授けられた問題を中へ実に

follow して行く。興味に任せざる、厭にならばすぐ

うつちやること。

水産に熱の振動、係り、或をみるもの多。綱の

tensile strength の潮水に浸した為、なる変化、振つ

た、繩の不完全弾性による、張力の变化、洋子

ヒステレンスも、色の異なる。それは僅し不完全な理論

を教物に出しておな。

夜 池上友巳君と、先を訪問

連句は松根東洋城、小宮典三、院君とやつ居る。

實に面白、吾も呆的、ドリカミカル。廿六あつて、

唱、おし、けなさい。表柳に於して居る、物理と

同じ位熱心です。型もやつぱり古人のやつ、長のかい。

やつ、新機軸を考へようとしてやつて居ると言うた。

長、同、人々のやつた所は、どにか、一、代では決して

出来ず、もんじは、ありません、エマ。

それか、日本人が、かれ、レ、ポンの、ベ、ト、ポンのと云つても

分つた、といつて、決して、分り、切らん。私達には、日本人の

血が、流れ、居る。近、吹、つ、く、づ、く、を、感、じます。年、う、え

不、粹、論、者、に、な、り、ま、した、ね、日、本、人、は、分、らん、とい、つ、て、

以上

理



理論の抽象的論理的な構成の美しさ

一つの事実自身の確定性が何より美入る。

其の裏では相対性原理をへか何れ次のものを引き起さぬから駄目。水星の43秒とかの光線のズレと

か曖昧なもの。理論は事実から事実を

導き出す便宜に過ぎぬ。僕は思ふ。

X Rayが手の骨を透過すると云ふ事、ラウ

4で鏡像をさるといふ事は確定し疑へない。

X光線の理論自身はこうなるか分らぬ。

物理学は連絡があり首尾一貫して居る。お

茶碗の事しか知らぬといふ事をスベリヤリズムでは

不可ない。熱も電気も基本は知らない

は知らない。エレキ、要素論、な、有性(初等的でない)

大学前期や高等学校程度の物理をしっかりと握る

居れば良い。

文筆の方は止めぬのぢやない。僕は我儘か、

書き度いときはいつでも書く。昔のものはセネカシ

タルで耻かしい。しかしあの年頃の人は、いんか知れな

い。年取つたら絢爛を枯淡と有りませう。

大学の池には馴染が随分深い。小池の境ひびは

許可を乞ふが中学讀むのは内着がぬい居るから

る。先生を肉合せか来と困られる。

渦動論

僕は科学的に書くのと文學的に書くのとを違ふと一本やつておいた。すしとり草の学名も同じく違ふのを牧野さんに聞いて返すした。

気象に云ふ渦と理想の場合の流体力学の渦とは違ふ。殊に入れ物で実験する渦は周りの條件は大変支配される。タービネスとが似、水中の

者がいつも問題になる。摩擦は必ず考へぬとけないが、粘性も入る渦、アルコールでやるのは面白いでせう。

グリランの結構。低気圧の上向きを、エリタリ配り積もを通り抜ける粒を、ゴットして、等放法で流れるかと丁度

日本海に其の *frag domain* がある、日本海は独特のもの。分らぬと云ふ事を分つて来る源。

食卓にお茶、又の二層、ボリボリたて居る。あと、こし(甘)此の館でし中々面白。中

中期実験の渦は予備的、で航研で玉野君のやつ二層のものが本式。圧力、温度を本式に測る二層を。

圧力と云ふが本場の物理的意味は曖昧。芝君は果してマノメータが云ふ水銀の圧力と *Kinetic theory* の圧力と同一かを研究して居る。曖昧なものをも、ゴットにとつてやる。

相対的をやり方では、絶対的に出さぬのは、音を出す源は *Vacuum* *Oscillation* 膜の振動 250 サイン ではキーン

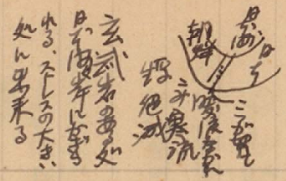
と云ふ。ピアノでも大変高い音、この奥中のやつの子供です。そんなのはどうな、まわりの射あてま、つくないか、なしてある。

ここかうま、所、定常波ならうらな、バン、海の深さは、かると似て居る。



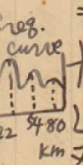


青島  
大津  
上田誠也



水産物理学  
中村  
左衛門  
秋山  
田内  
大成

金星、月、太陽に見られるから太陽系共通の  
事ではなからうか、試験問題をもちと異れ  
と云ふなら此の間にこそ感ずる所を述べよと  
仕方をしやたらおなじく加減の事をかいてあつた  
語法令、Wegener の Land Drift Theory を良く述べよ  
どうしても云々いふはならぬと首肯する者が多い。  
それと云ふと日本海方面の *eddy type* の島の残つて  
居るのは網目の様子を飴を引裂く時と破  
れるのと同じになる。太平洋に浅い海床があるのと  
同様に日本海でも山並み見された。日本の島は  
海へ泳ぎ出した。  
余興に出る島の島



或、樽陵島の植物の大陸的豪華 日本に於ける  
家の骨、神功皇后三轉行伐の空易うしか云々。  
比、其の若大陸と境を思はるるを思はる。私の云ふ  
事、書く事は *Physiologic Romance* かと云ふか、長岡さんかそれも  
私に教へた。しかし法物理学は（のロマンズと思ふ。  
夜更潮目に関する実験のお話、  
僕が水産物理学の元祖を以て任じて居る。サ藤原君  
も推薦したのは外に其の人がないと思つたからで  
果して仕すもした其れから中村左門太郎、秋山峰三郎、  
金魚の死と炭酸ガスとの関係、フラスコと粘性  
鹹度に依る其の流の關係。ヨネリ君に鑿りを  
吊した時の並び、ヤギモグラスの關係、  
time rate、hysteresis かはり  
ある。

大成

田中

◎ 激励

竹屋

水中空魚は 池上君が大分やつたので僕ではよい  
君の教なら画の上でしよ、竹内澤君を描いたかある  
一時同位でし描けますよ

君の俳句は大分アツた様だ、つて見るとうまさか解る  
芭蕉、なんか晩年ののは実におま、夏目先生の  
別もや夢夕一條の天の川は 漂渺として居て  
笑によい。修善寺のものは良いのばかり。

今報告又を書くのに遅はれ居る。渴のはかからあせをう  
潮目、花ではしをい、と云ふ、学位論文の優位ある  
一年半はどうしてしかりませう、半年は準備にかつる。  
僕は出家子の会へはすて出な、目印を白して眠れおあ  
すに郷音く。人は随分話ぬて来る、お学問の事、おまの  
一向構はぬ。世間話は何。しか人間が窮して身え

銀、三越などヒヤカすのは好き。  
サナルオリダシのは潮目に余りぬ、おどし潮目はたぢ  
カナルオリダシのかもとらしい。クリエールの海津はにある岡  
の様に水平渦動か、極くドラマリーのをやんよ、

波、<sup>波</sup> 朝目があるとしてやるのです。  
釣針ははメタロケラ、みかいてホク、<sup>ミカ</sup> みるるよ、<sup>ミカ</sup> び  
見る。磨き方及、<sup>エツ</sup> 磨、<sup>シ</sup> しかむつかしい。理研の管井

君がワイヤーのをや居る。親戚は、<sup>ミ</sup> 年、<sup>ミ</sup> 二、<sup>ミ</sup> 三、<sup>ミ</sup> 位  
たねる。俳句の仲間を時にたねる位で大抵は  
何ふか来る。

猪剣

Bindhu

シ

猪創的な

Biophysics

その  
こと

六月廿日

水産では、このようにオリガタの仕るを来る。田内君は学

生の時を豪傑でビリにきたる一番なる頭尖度よ、

日本の *Physicist* では屈指のオリガタな人。透き透きに就て

るにホウの式のおはまると、田内君の變化のちねの様。

君は水産に明るくを又ら生物物理学もわき見給へ。

長男は牧はかおあふりお来るる。牧で論文かこあ

ゆきに数つたのでお事分るをよ。次男は牧が嫌をよあ

に似て居る。光る海月をもの光る工合を研究し給へ。

海坊主、船幽霊など海の怪を科学的に研究し給へ。

雲尻とよふ瑞巖寺の坊主は土佐の人か、えらい

人だ。生物物理学中のまよるる両燐を、當分の

研究。火玉が海士に飛んでお居るの様に引つ引つて

粉化しわけて青白いまを。水産に引合の地名の取柄。

歌謡会 ルクレチアの歌、BCのソノ人。

「ま、モリカンの思想」持つ。林本悠は幸福をねく。

徹底的の *Materialist* かの不ア浮標派がエネギタツク連続

を説くはし *Atomistic* 感覚ニ真実あり、偽りあり

判断であるとした。原玉は日向の塙のやうに飛び跳ね

る。それに幾種かある *molten* 文字のやうに組合せて

物を造る。之は構造式の事を云つて居る。鉛の球かぶるは

熱くなる。水のサイクルは海からせせせし川となり又海に入る。

*Fashion of Love* ミは面白い(雑) 雷のお来るは積乱雲が高くを

風が溜まき(ポイント)が破動衣して稲妻を。ニのポイントが膨れ水に

ついでに龍巻、地球の丸のはすと昔に知れど今のと、直至が%しか、  
がはあ、

磁尺の粉の反撥も。音波の散乱的進行、光の直行し  
物の周りを包むが飛んで来たり感覚をせず  
鏡の反射の強烈した。死は功をくなくそれは死を感する  
ものは居ないから、後述して科学者である。精神も物質で  
大変軽い。之は笑ひるべきでなく、百年したら本当になるか  
知れない。物理学のideaは古くからある。唯実験が来ると  
とるふたはある。味や嗅香にいつしあ時代から殆んど進  
歩して居ない。太陽からエネルギーのsheetが飛び出してくる  
空中電氣の原因は宇宙放射が太陽の電子放射射から来  
議論は今にある。エネルギー、物質、空間を考へて居たとして  
量子的に時間空間を見た。カルバウクの考はま、地球  
はトリスに静止して居る。冬井戸水の暖いのは水が地殻の収  
縮の爲に熱的収縮で熱せられた。エトナの噴火山は  
地球の吹出物とした。天作の運行、エネルギーの起るを  
切を居る。彼は自殺したと云ふ。

八月十七日

「渦巻試験機は結構過ぎます。一昨日航研のかりに  
寄つて田内君からあつた。聞いた。方々軸の位置をかく  
空真とれば一目瞭然とする。硝子板を張る端の縫を  
除かなくては行かない。之は渦の研究と思へばよい。あの統計は  
結果が纏つて居る。墨桌と漢橋(星潮)潮勢力との関係は  
此の次の研究問題にし給へ。釣針は臭しみだね  
君海亀はどんなに鳴くか尋ねておきますか、物好きかどう  
土佐は変な事だ伊野郎が死ぬか一日だけ行った。

瀬戸湾の築山あたりが松島よりいね。

仙台は落付と居好い。本多氏の之を物理運中めしと云。宣尊のうま、  
之から居丸だ(一)と長男と飲年くに行かふ。長男に物  
はなまき困る。ちうと同級と汚しまかい上る地へ失り山は  
ないからとめ。昔果は分り熱心かしめる様音でルル先生に  
「まなさい。夕ひから。」君うま、潮目の高さはから岸思ひつた。  
これはめつた人に云へないね。  
水灌の門を出ると先生と今ふ婦婦今をひヨイとあげれた赤  
めらい嬢と相ん葉はれる。元元にまるんは金綱くとままい。目測  
は労のみ多い。安外大切なものを見落し後で困る」

九月廿日

十月九日

池上夜

自然が一番の師匠です。もつとよく自然を見つけ  
ればならぬ。何でもやつて見なければいけません。やつて見ると  
出来ると思つたらか出来ない。いたづらしなければ  
何も出来ません。理論のんはドンツツ風の要いい実を  
吞み込みんだ人が多い。間違つた假定をしても結果が  
合(は)良いといふは駄目。実験の結果と合はなくても自  
然な正しい考え方はあるものな。実験の考えを吐き  
ドモ一つ考えを吐きと云ふ時に分りかけて来たのだ。困ら  
なくとも、けない。思ひひかけない事にづかつてはじめて  
大発見が出来る。思ひ通りに行くやうなのはやつしてやん  
でも同じだ。何事もも腑に落ちる迄、四を考えりやかん  
先生がなんとならうと、本にどうかとあらうと、自分の腑に落  
ちればよい。金儲けはどうかと面白くなり、金にならん仕事が  
面白い。

海鳴  
うねり  
エネンカ  
用部  
下

僕のハテト、ラ、チのわとれる。考へだけあるとれとろけるが  
実験しなけりやとる氣はない。

近頃 針金通ツツトになった。大金属円柱均一に考  
たら飛んではない。あんな複雑な得体の知れぬものはない。

ア列クは怪物です。アーケヤスパークの不連続的な電力  
は、チと分つて居ない。中倉藤岡君が夏休にイギリスに

長い尺牒の各都スケルトンを描き見たり馬鹿に遊ぶ。  
僕も小田原でヘルムホルツの共鳴器もつて行き、海

鳴津浪、ウネリのまき込みの音の週期を見たり。  
週期を見るのが一番よい。五ギギ計測きんの週期と勢

力の関係ある。週期は最大13秒で、大抵25秒位。  
高圧線の上を良く成長とか船橋発電所まで

作良しかぶる。皆宣付かはいらる。世間と繋ぎを  
学問はうるさい。イマジに対する放電現象なるか面白

い。何か出るよ。漁獲の統計なんて案外だが、dataは金  
の嘘とやらは年々信じても出来ぬ。

地震計がなんでも加減のものだから信ぜぬと云ふ人と  
其の函く波形の小さいのも一日ツツク人両方とも感心せ

ぬ。統計的な法則を自然自然もつのに外れたdataは何か  
へんな事あるのが、冷靜冷静に考へるとよく分る。

僕の大島、梁木は日本に氷河時代のあつたかなが  
ラエ、チー誤からどうし有り相。昔、対馬がつかぬと

居たなら。冬の松本あちの気温の各年変化と

昭和三年  
一月廿四

日本海沿岸の海水温度との相関

(年表化)

(今は長崎に暖流を Low. として示す。絶対温度を示す)

水産の豊直分布を数学的に解くのは甚だ。世界の海洋の赤道、極の間の大循環流の分布が條件づけられる。

船湾に風が吹き込むと上層水は奥に下層水は沖と動風と水の動きはエリマシにもよると深海では45の傾角をつくる。これをこれにはいれない。浦外はふしの島々余り荒はあるまい。湾外に風吹き出す時は上層水は沖へ下層水は内へり込む。

もつとも現象をよ見よ。行き過ぎたる人間の智識なんか浅薄なものだ。人間の耳をんと馬鹿なもの。英法(英)専門外の英人では駄目。

社中君と社。7月本誌殊に古事記にコレ語の混入した例が多い。アラビア起源 ↓ マレー ↓ 日本との疑がある。アイヌ系統 割に少ない。壇の浦戦記とスカンディナヴィヤのオラフ戦記は馬鹿に良く似て居る。今十三ヶ国語をやつてフランス語を電車やつて居るをさみに朝と寝る前、論理学などい加減、論理の遊戯は形式的で実際にはありぬ。スパークは不思議でもう何年か中谷君とあちち動かしやつて居る。甘みの消える迄の

Duration of Temp. var. Spectrum  
海流気候との関係など熱的輻射平衡を考へる事。Liquid Crystals が芽虫的の渦動する事を見出しなものは液体下結晶は 炭素の創製です。

粘性を考へ入れた渦動原子を以て *matter* の ultimate structure にはあが  
 と考へ居る。ヘルムホルツやケルビンは不可壊だけも渦の  
 性質から引抜いたが仲々どうして。渦の色々の性質は  
 物質の共通な性質を示す。リヒテンベルクの *negative figure*  
 や *spark* や何かも皆渦動と見られる。  
 真空放電と同じ様子を *negative glow* や何、火花放電も  
 実に面白い。(リウムの *negative glow effect* は色々の変つたかまね  
 僕は(リウムかうんと欲し。中谷君に西洋を送つて貰ふな。  
 藤原は貴族的な名前。酒吞童子 *Setan* どうや  
 (マレー語で悪い、悪魔)の子者の純土合。ドンタクオオヤ  
*domtag*、*don't work* はどう) 日本には朝鮮時代流か  
 少々、アタママレ流が交つて居る。琉球語は台湾の  
 土蕃語に似て居る。台湾のはマレー語と云うんと似て居る。  
 西洋泉器も矢張大きな目的でやつて居るがどうし  
 人類は一源らしい。そうえうく民族は離れて居ない。  
 木村鷹太郎の様で居るが僕のはもつと物理的だ。  
 気狂いに近いかも知れんか。この気狂いが眞面目な人の  
 爲に氣ばよ。今に字士陵で英を發表し、轉脚の言語学を考へて居る。  
 黒土の影郷を以ては氣柱の信熱量部が氣柱の影郷  
 影郷が直接だ。太陽の勢力は下層の表面氣温には  
 そう云へない。氣圧の変動は大氣の環流に變動を  
 起し風が起り其の爲に氣温に影郷があるか。  
 定量くと云ひ定性的をくさすのが氣に入らぬ。





昭和四年

四月廿

十日

する。しかし水蒸気が多くなりると吸収される。秋から冬は高

気圧性の好天気は、透湿する。蒸気発生は、いゝが、おなか、

水晶スベクトルを、キアトゾイの強さを、器機から、(終入)

航研。実地の体験ある人では、いゝ。本場の海美が、(終入)

夜間、連句を自作して見はじめ。芭蕉や其

の門下の如何に、境地の所まで、神通自在になつて

いたかが分る。君も高等官になつたから、家庭して、(終入)。女優

才三句、脇余情を盡すと、漢語を言ひます。才三句が次

の句のつぎ方がむつかしい。廿六句の歌仙中国じ

つ、イオリと云ふ様な事を入ぬのはむつかしい。

僕は中学の時分漢詩を少しやつて見た。○の中に

字を入れるやうには面白くない。宇田源深、日本新聞に

居たやうな例から知つて居ます。水色変化、イメージ

と、(終入)。海流瓶、沖を見よ、山岸に壺を、(終入)。

逐次研究法をとれ。連句を、積分方程式になる。

とにかく新しい見方、*discovery* 新らしい生命のあるもの

にある。研究の基礎を樹立する方針でやれ。

商船を、(終入)は一遍拾上た瓶を、面倒と云ふので

又海中に投げ込んで、又拾はれる。ないとも限らぬ。

一例だけ、(終入)はよくない。風などとの関係も、(終入)。

下層冷水帯の上昇といふ事も考へられる。

潮目に関する君の調査は確かに著しいものだ。

六月廿

風との関係を良く注意せよ。適生を考へて週単位  
連続して観測せよ。之は僕が数十年来やりた  
思ひなからうとておいた問題で、湛りの水の行衛が  
問題だらう。生物関係の事を見ねばならぬ。  
潮の要となるのは生物の繁殖の爲出す虫  
カス等の爲ではあるが。含有物分析もせよ。  
瀬戸内海の調査は潮汐の影響を余程考へねば  
らぬ。小倉伸吉君が大分やつて居る。

水路部は潮流に力を配、水質は水質比電など力を入  
れるのよ。特長を持つ様は。

Variability mean Anomaly など簡便でよい。連続的に

変るものは小野澄之助君のやり方で行けばよい。  
君は役所の仕事を忙しが僕は自分で忙しくして居るの  
一冊は去年の夏描いたが今年も大体どいかに書  
かくつもりだ。

水色計や透明度計は根本的研究が必要。  
里潮を本当にあらはす。スケールはアルプス  
山河の青く澄んだる潮水の水色で、黒潮には  
それで行かぬものがある。なほ里加つた調査な  
果利をいふとすればならぬ。スケールも、  
フオートで見てくると根本から一度関係をきめ  
てから出さくは嘘だ。中谷忠之助君の水産  
者としての辨察が感入る。特種な面白、死である。

今迄は材料の羅列の論議するをかなりなかつた  
から色々ある。一つまとめ行く様にやり給へ。しかし  
又やり過ぎぬ様に。

九月廿日

北竜計もよ所がある。塩板定も過信して居る。  
精密な器械を使ひろか悪いと役に立たない誤差を要。  
潮目は水平軸の渦巻でせう。それが筆直軸に  
移れば冷水固も出来や。島のうしろに潮目が見える。  
左の浦は狭いのでよく見る。

海没の予報は其の基礎を固める研究が出来て  
からいふべきでない。天気予報はもう大分出来て居るが  
らうよ。アタリを月々出して其れの相関を調べてそれから  
予報の可能性の根拠を立てる。

次設自記寒暖計は結構だが多額の費用を要  
する。暴風や海荒れより失はぬのを防ぐに新計  
設計も考慮してはどうか。

十月十三日

夜宿。この夏火山灰（破性息）に動物油を収めて  
した。石油浸出等もよく実験した。島は北陸より油脈の  
説明。第三紀の島。つる。砂や礫土の多。うらから自  
は本列島、北海道は第三紀の右噴火と火山灰でもち  
上つて出来た。こして東京から新潟の支那穴がある  
いと思ふ。日本は島に亘る寒帯地帯であった。其の  
潮目と寒帯地帯が多少なりとも。対馬海峡は寒帯  
いた。島は日本海側へ多かつた。

地質、水産、物理、色々の所を冷かす所から  
うらから知られるなら、しを冷かす所、面白から作るか  
ま、しと笑けた。

「バート」など、著述を存出してもいふ所が、ない。

「塩」を自記さす、岩礫の重気、塩分による法

(2) 浮力による法 (3) 比重による法 (4) 比重による法 (5) 比重による法

①は望める、③か④も有望、乾燥を想、旋形の

どうにま、耳、煙、煙、煙、ある、一、時、毎、に、交、代、に

と、吸、上、あ、る、一、時、毎、に、落、下、す、滴、の、熱、ち、る、粒、は、其、の、時、間

から出る、赤色の時と無色の時とを、 $\frac{1}{2}$ の、影、の

明暗の差をとるのがある。

水、中、寒、暖、計、は、水、に、塩、へ、傳、導、を、す、る、こ、と、

この、真、ぢ、む、い、無、甜、作、難、を、す、ぎ、。

君はア、ア、ル、ら、しい、セ、カ、セ、カ、し、て、急、ぐ、ま、ま、書、き、し、て、函、に

あ、ら、わ、れ、て、る、線、は、二、の、様、に、ご、つ、に、ゆ、つ、り、せ、た

か、結、局、徳、だ、若、し、君、が、時、来、二、の、方、に、献、身、す、る、気、は、

透、明、な、水、色、も、結、局、は、水、温、塩、分、の、函、数、だ、

ら、う、え、れ、を、見、付、け、ば、よ、い、。

余、り、慣、用、の、此、の、系、統、の、水、を、お、風、に、つ、か、ふ、と、肝、心

の、根、本、が、分、ら、な、る、。

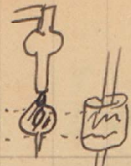
僕、は、ズ、ル、ウ、サ、つ、て、来、た、

短、氣、を、起、し、は、け、な、い、土、佐、人、の、欠、点、だ、よ、こ、の、人、は

ゆ、つ、り、を、居、る、や、う、だ、。

十月廿

十七日



十月廿日 原稿のその間に目を通す。校心の要領を教へらる。

昭和五年

骨質  
五月廿

九月廿

多。その大いなる其ま。ア。エ。ウ。ク。リ。キ。ヤ。ニ。レ。君に論文

の書きたるを傳授したと笑はる。  
癖、意外な所で意外な垢出物があるから注意して居る様に  
鑑研、人の名を「清」にせよもしも君が「清」に  
「清」の字を「清」にせよもしも君が「清」に  
「清」の字を「清」にせよもしも君が「清」に

下啓助氏が水産の科学化に初めて著目された。  
網糸の府の事を物理的に扱ふ事を示した  
意の味に於ては「清」にして居る。 感じの氣候で

気温、輻射蒸発量と云つたもの。 区域を分けると同じ  
ウリ口でやればよい。 唯重要因子のどれをとるか同じである。  
Climatic Factor と云ふかある。 實際生活上大切である。

対馬海流の消長は裏日本の氣候に大いに関係する。  
降雪量から延ばは高気圧の発達に程度に關係する。  
問題のみつけ方は田内君、まゝ、大まかに擷んで段々精錬する。

昭和五年  
一月十九日

五方分の地面に山崩れ所と云ふ引く仕事も續けて居  
る。 良い隠居侍。  
人は四十一五十才か一采由女につまも金につつま  
あぶない。 しかし決して責める事は出来たない。  
僕などは道義心に出発して夢の仕事をしないのでなく  
腹病をのむしなだけだ。 功のいのは奴等。  
魚が水中で山を見ることは單に縁の非対称として感  
功にあせつてはいけない。

三月十日

夜 陸軍省 士と座

赤いものは陸軍省製より採用すべしと直る。可愛  
いつぢやないか。サビエトロヤや支那などは風土が本邦に  
共産主義<sup>の</sup>適し居る。日本では幾ら苦勞うしそ  
いの間に日本めになつて大楽だ。圧迫しはいい。したいが  
儘に<sup>に</sup>放つておけばよい。

此頃外む人が書道を科学的に研究し出さる。  
僕も理研あたりが顔真卿や王羲之の筆跡を  
写しとて、イキ極でも重心をはりえれに対称的に  
ラヂウス<sup>の</sup>いびきがなるといふ。各々の楀目は異なる質量をはかると  
面白い結果が出さう。之を上手な人の字とくらべて見るとよい。

武陵桃源かモラヤのバインの中にまがらの姿である。  
百花燦乱春を謳歌する此の思ひ来さかへた人の  
話かつわつたのこなきが。

ラテラル、ミクレンジグ考へて見たまへ。  
西洋人の真似ばかりではいけない。少し変つた事をやらねば  
ならぬ。混合の色<sup>の</sup> ideal case を研究してS字形の<sup>盛</sup>減曲

線の<sup>の</sup>意義なども研究すること。君位の争から僕位の争迄  
物理海洋<sup>の</sup>子をうつる層は、大したものなる。太にやり給へ。  
文字が、<sup>の</sup>民性に大きな影響を及ぼす。ローマ字を採用

すると日本の<sup>の</sup>民性が、意外な変化をするかも知れない。  
狸穴の天文台を本郷から歩いた次、お茶の水の替り案に  
こまかした。竹崎<sup>の</sup>学生時代の秋友だった。坂を  
荒し廻つたものだ。日本料理屋などで酒の<sup>の</sup>世間知らず

四月二日

五月

七月

九月

五月五日

のすけとやへは色々な事を教へて呉れた。ワラタナと云ふ斎席  
が今の牛込館の所にあつた。江戸川に橋本と云ふ鱧屋が  
ある。其の所いろいろと云ふ牛肉屋がある。  
僕が映画を一周回一返位観ては元氣を付けにくる。  
別に面白くないが。ジーンズはレビューを足さず夜が眠れな  
と云ふ。愛交帯のある清り草がある。本多文は冬は執  
海の温泉(湯)夏は海岸の海水浴(湯)散漫(湯)出かけた。  
夜は十二時頃迄し実國(湯)し、門香感心し居た。  
興味熱心、根気が研究の根本。年中居眠つて居  
かと思ふ。本を流し流るやうな人。日本人と云ふ汚ない、  
カフスもカウもつけいた。

七月一日

一へん直まの所せ又直まいるやうに居る。直まの所の意味  
をよく考へて見よ。  
俳句 君のは句境も掴み処もよいか字句の洗  
練が足りない。何かに表裏と行くと。果しみとして。  
ホトトギスよくはないが。連句は面白い。歌はアウラギで一寸やう  
たかそう面白くない。里瀬の研究光しとしれり流木手許へ、官信長。  
火事の物理の研究した。東京の人下の火事を起す確率  
それから窓などどうなるか。生物の人の人間を分子として扱  
つていかによ。式から出した計算値と実際とを比べたを知らし  
やり絵への人間でなく、奥なる奥、やましいがうといつたが、  
俳句は内に感情を包んで直接に居る。画賛は画と  
趣向が同じではない。之と配して妙味がある様だ。

九月廿七日

十月廿七日

十二月七日

廿日

昭和七年  
二月三日

七月廿四日

俳句は空間と時間とか definite なるを要す。季主題の

必要なる所以は其処にある。重松艦長は篤志の人である。

今世界的に最も権威あるものとなつて居るのは地震

研究所、実に皆さう動得る。

俳句季主題感を充実する事、主観の端に投ずるは

季主題である。鮫の眠の秋の入り日と眠り 之はいつか 燕は着

照元 季主題人 Terre moto 地震と云ふ意味のイテ 近市 軒に新地

其裏田先生といふ存の故を申のをも 上、つし作してなへんを云くある 先輩をんかちうと云

うくなくと校長か生徒の前、先輩宗祥論やつたあと

ごうこのけ教諭が、その妻に本止ま、皆はよく楯の両面

のつしりか味はとつた。

俳句は己を沈ましておいて自然に托して扱はす。

感情と自然が一つに融合する所。 先日の

敷はせよ人を眠んかり白を眠んがしほいけな。

秋の入り日を眠まさなけはば あらうま。

僕の休みは年に二週間、現研はかまひ、まあ

精々遊ばす。

僕は世間位賞する居る時一番働いた。働かなく

なる程、給料が上つた。しか僕は之を昔働いてからだと思

つて居る。若い時分に働かなかつたら年程果になまは あお

背水の陣を敷く事だね。君は真剣勝負ばかりして

撃つ奴めをいけな。 題詠を澤山やり給へ。

昭和

昭和八年

二月

概念のぼけはよい。実感が出るところは。

果盤波ゴクパンは海軍の海軍部が、宇宙線が頭を

突抜けたイオネです。宇宙線の変動があるといふものは

おやぢし、中津波が船を揺るがす、物理學宣傳業、

五重人格

本名と雅号、例は着物など、大礼服着て湯屋へ行く人は

あるまじい又宮中の方では行儀。其の時々に都立のよい

様に着かゝるが中身は、同じく寺の坊主、本蝶山の由

来、蕨、能句は陣内をきけ十分ねて力強いよに

思つた通りを、自分のオリカチな観音も、緻密な観

音をも其の儘かけばよい。田先生はほんといふに

出来た方だった。里王流しの水の石をはかりたい

如生術、官界遊泳術を学び給へ、僕も若い時は随

分つとめた横波へ送つて行つたり、靴を持つたり。

地震の予報は不可能だ。津浪の予報は地震がある

ことから海岸に立つて潮の退くのを見ればよい。

俳句は中人を擲め、象徴的に言ひあらせ詩である。

散文でない。季重なりはいけない。月並はいけない。

新俳句を見よ。此柿句集が出た。談を足給へ

小伎は一人の澤山が、それでは人か二人か精柄、

五人七比の教る出来ぬ(先と好)、君は其勢は十人位

出まらぬら。模型実験は相似の原則をきかぬとある。

五月廿六日

四月三日

七月九日

八月廿日

文章はあつて直に有のまゝを科学者らしからる。  
英文、君して下からして早く直さなるといふ様になる。  
呉れ絵へ坪井君は一所でもおまゝとて程上達した。  
俳句、夕方千かなまきる。自効詞、他効詞の混同、ハカラス切が

昭和九年  
八月廿日

風流は *fall free* に通ず。心の自由度が大まかに  
快りは人の自由な境地。科学者も藝術家  
同じ物のあそびめると。物理も藝術も同じ。  
ヤツコリンは藝術家、街の灯もゆらぐ安全なもの  
と興つてまじい。すべれた藝術家の作品に満足  
するものはない。貝と面白かつた映画は、即ち強つて  
展る。心を自由に持つば、其処にうつるものもろの影が  
一切の偏見をとりまゝ心の鏡になる。

三月廿日

四月廿日

大風、マカス、~~（？）~~ 俳句硬ではいけない。  
ニムホカ、~~（？）~~ 結構な。自分かえらうと思つて人、  
子規、漱石、北原氏、余り親しいものの本の批評は  
奥慮落になる。館巻は「鼻紙」へマツの燃えきで  
書、大野帖をあつて丹念に乾か下張をした。  
かうすると当時の様子がよく分る。と毎年講義  
された。

五月廿日

夜、~~（？）~~ 本へ本版画、水彩画、油画、空真  
を入れたが、今は春画でも入れようか、僕はゲートの様に  
精力あればよいが。I君は仕事よく出来るが異性にのび。  
夜は今でもカミに行かよく新しい研究を follow して居る。

僕は秀才。現世でうまくやるとよいが、後生にあらはれるのがよい。君の俳句も悪くない。よいか三つばかりある。

北倉君は石岡四子規、夏目漱石、狩野えん並に、自分の生涯で極少数のえらいと思つた人の一人。小学校の先生みよる同輩だつた。岡村えんと仲いひの逢ふと口喧嘩ばかりして居た。心かまじめで居てエロチックな遊事をつたり 待体か知れなかつた。

ガロの標識放流、鱗を染めるが体の一部に有る。染上らぬ 染色もつけられぬ。

新聞を新聞、用件以外の手紙を分類して目方はかると、書齋と社会との交渉が小さい。店をもつて通して行けることがある。アレなどとはけなしたり、威張つたりすると、世間の人は成程えらいかなあとはんとにする。自分からこれはつまらんなどといつてはいけない。そしてそんな人(俗)に限つての上の人にへこする。

(僕も60才過ぎたら放蕩でもせうか、カエぬりでもやろう。)今の教育はしどろだ。中等教育の物理の本、汽車も飛行機もある。此頃は不平ばかりつて居る。しかし不平が国家に役立つものと思つて居る。

此の間の日曜に自動車で桂川の上へ行つた。實に百年前、そのまゝのやうな人家があり、緩やかな多摩川、丘陵愉快である。川の流れ、奥、メロン、カ...  
二つの学度の論争など大抵二向とも各々正し、といふ事が多い。生物と解剖。

六月廿二日

独りよ 矢張 平均は日本より下だも二三人え  
らいのが居る。日本では見る人がないから学界をだま  
してへるのは譯ない。ウイヘルトは実に真似の出来  
ないえらい人。黒板へかきわらうなると消し液又  
同じ事をはじめからやつた。二人を筆写可でも矢張  
ボんごは奥えと一諾に踊るにた。ガリチンも天才。  
尖学ウイヘルトのウイカ解の位の位の面を正假想舞踏念ぶおど  
つた。アクトは凡庸だが、<sup>老</sup>生涯の <sup>積の</sup>は大きい。  
<sup>老</sup>エカ利尻の海岸の石ですが、アテサイトらしい。実によく  
楕円形になったものだ。川の石は北つと平々となる。丁度  
シヤホンのやうだ。面白、実験の対称だ。  
睡蓮は朝開き晝しぼむ。面魚、花には長く  
咲くのもすぐ済むのも奇り色々。  
自由ヶ丘の次男 辰子が自分はまだ 行つてゐない。  
夜は沖田辺に時々散歩する。一二丁位しか歩かない。  
海流の速と水温の高低は大きな研究問題、  
そう竹筒竹筒に行かぬ。君の解答は正し、流れ早くな  
ると下層水上昇する、タービュレンスです。  
寒流が極く狭い帯を走して急に入りに入るは二可  
相及する。対渦の間に入り込まれる事から説明  
出来る。太 <sup>相及</sup>  
太陽里点の影郷多は作用中心を動かし、大陸  
縁の日本ないは相関 <sup>相関</sup> なる事がある。兎に角

黒、兵増せは輻射は強くなる。冬、気冷の爲に水盤は低く  
且、寡降水の時、高城であり得る。

海洋学談、今は九月迄は、この火終、まぬしやと思ふ。実験も、と云い、  
自分、はつとめでひまがき、草花の世話、な、と云ふ、はら  
除、虫草の、詳しい説明がある。

係累は出まゐるだけ作りたくな、世の中は、及対に、人ども  
係累下の多、いのを喜ぶ人がある。

僕は之、仲、喧嘩早く、小さい時は、利かん坊、我儘で  
慥つたら、何でも、ぶ、こ、わ、た、。独り、自、子、の、せ、い、も、あ、つ、た、。

人に、頭を、下、け、な、い、所、も、土、佐、人、か、。た、づ、小、さ、い、時、也、思、に  
出、こ、其、の、爲、一、土、佐、人、う、し、さ、か、少、な、い、わ、ら、う、。

は、め、大、学、三、年、の、時、家、内、を、世、つ、て、西、片、町、に、住、ん、で、病、氣、を  
妻、か、を、と、り、本、郷、に、下、宿、其、後、二、度、目、を、世、ひ、原、町  
へ、移、り、こ、こ、で、洋、行、歸、り、弥、生、町、へ、ま、か、ら、大、正、七、年、は

今、の、所、へ、家、を、建、て、た、。田、丸、先、生、か、勸、め、ら、れ、た、の、で、  
先、生、は、近、所、へ、来、て、飲、ま、か、つ、た、の、で、せ、う、。僕、は、家、を、た、と、る

と、拘、束、ま、さ、る、の、か、嫌、ひ、。火、を、何、か、と、良、い、庭、園、を、と、  
友、人、か、佐、る、ま、設、計、に、協、力、ま、さ、へ、つ、ら、し、て、時、々、い、つ、景、色、

だ、と、見、こ、る、の、も、よ、い、。この、辺、に、は、何、に、も、執、着、欲、心  
か、な、く、な、つ、た、。先、か、短、か、く、な、つ、た、の、か、。昔、に、は、衣、

食、佳、の、食、に、は、相、当、欲、が、あ、り、。肉、菜、が、大、好、き、だ、つ、た  
の、か、此、頃、は、及、対、に、余、り、好、ま、ぬ、。め、し、は、今、日、も、半、分、位

減、ら、し、た、。

七月廿四

わからんことばをいふ

「これは君幸福だ。分る事の人には幸福だ。澤山の問題がめしづつ分つて行くから。」

軽井沢からかへるお母さんお返恩く丈夫相

「はじめは一位。今日は二里も歩いた。頭がよく休まった。もう一回位行く様だ。」

俳句 句境は出来て居る。短句勝及ぶかはけ  
ない。練習もせよ。連句の方が俳句より複雑で  
むつかしいか面白味がある。字をおまかへ、作りかよ。  
撃斃し結ぶ。上滑りばかりしつはいつ迄たつて深所  
へはいれない。おれかゝるは厭味がある。

蝶かり犬の手から逃げると云ふと音の味が複雑になる。  
此の天気は此の間あたらしく蘇る君も弱つて居た。  
随筆ももう倦また。海洋 君に云ふところはやはり  
分る。何

何か隠して思はせると云うかなければならぬ。  
すつかり云つてつたむは散文的。

夜 僕の俳句の真はからい。もとよりは余程上げ  
て居る。散文ではいけない。詩、藝術は目に見た  
其の儘のものを飾るに余情、云々おぼせ何がある。  
科学者には短歌より俳句が何い。短歌は  
主観的、俳句は十七字に感情を盛る詩形、  
やつと十七字になつたといふのは、いけない。  
云ひかへてあらゆるバラエティーをつくること。

九月十日

十月

十月

かきと  
渡

からしきの  
渡しの

十月廿日

十月廿日

自分の経験の多い中から拙き出して。連作には多少

本質的に疑問を持つが、稗史としてはおもしろい。

俳句は禪とよく通じて居る。奔放自在に、鈍

鋒ばつてはいけない。(まあ裏面にはるかにあつた)

数年は季が半月程違ひ居た。信濃の高原の

秋の草花の咲くのがこたつた。

五高のとき、夜に起き起され、土佐の仲間が喧嘩に

行くと、いふので、まうんと思つたか、とも聞き相もあつた、木刀

など、上げて、堀のりへて、比自についでいつた。

東の空、月島の夜景、渡しの風情、も一度行

つて見たら、俳句でも出さうだつた。

官界、遊術の名人、オツチヨクヨク、いゝ「震研の創之

でも、説明むつかしうか、地震を研究して其の災害を出

来るわけ、少くすゝとした。

田代君のやうな天才は、必揮させるのか、世の中の為だ。あつた

海洋談話、今は座談式に因甚しくならぬ様に。

平田君は、実はオチカヒな人。臣の植物の研究、フレバート

作つて、これに物理を応用して、斑紋を、といた。

俳句は、今度落した。自己陶醉には、いけな。人に命らぬ。

境地は、摺に居る。詩的表現をせよ。レトリック、云々現れし

方が大切だ。季が重くは弱くなる。来るか、去るか。

行方、おちかひ、句が動かぬ様にし給へ。



昭和十年  
二月十四日

むつかしい。言外の感じが大切。句情。荒浪海や佐波  
に横ぶ天の川、寂し、壮大な天を拍つ其波のものを  
こも燈のくら、佐渡のものもなる。其処に人を動かすものは  
ある。碧梧桐の、白い椿、赤い椿と落ちにけりは  
世敷の元多、赤と白との椿の花が無数に重なり  
あつて落を居る。おせつほい、白、早春の情景が、かぞ、と浮ぶ。  
夜 一月の調査は大変なつたろう。

このう狐の纏巻の横行、気が合らん。養狐、うろこの注。  
漢坂予報は、小島、ま、者、い、合、る、様、に、親、切、に。そして速報を  
まじしこやり、それから小島、ま、者、い、合、る、様、に、親、切、に、は、り、加、減、の  
事を云つて居ると信用となる。独乙の気象台では

天候予報は *Tenshu's* *Wise* と云つた。確率か足ぬも  
多々といふ云方。〇年の次に〇年のかうなるかあつたから

整言戒を要するといふ風にかつてはよい。

冬風の東の間、鴨の遊ぶらん、苦しい航海のほと  
しん、一体オの君か、プロジェクトされて面白、実感の句。

八君気の毒、フイナル、パイプを扣む様に物理の基本  
をやらめと行洗る。君の研究はよい、いしく今の調子で

やり給へ、そりや救済的、やばい、益々よい。流柿、一月、自作  
歌仙の載るのを賜はる。

足利時代和歌から連歌へ、連俳へ、設林調へ、芭蕉へ、  
俳句は佛教、禪、南画と、底に相通するものがある。

しかし元祿の華美遊情を反面に俳諧の  
成風なだつた事は注意される。俳句は自然をも最  
よと穿す日本人に最もよむいた詩である。

歌は主観的で感情ゆゑ、君は歌かうたひせすなにか。  
君も物現の一般の事は忘れないやう勉えず氣になし居れ。

長男中谷のとう次男猶又…… あと三年停年……

室内の遊戯は主人、玉実、僕、僕は負け嫌ひで  
よつほど氣の置けなれ友達かごいど勝つし相手を見て

面白くない負けたりよけ面白くない。ほう君も一生懸命に  
やります。助手を澤山つたてある程だ。任かて君が其の大

綱も掴んで居ればよい。

三月廿二日

霜様をから斬るく御体息になつたらよむせうし

事實を主としてこれをうまく排列して説明すればよい。

膝感じ、心持をもつと深く、心理的につまみかた  
膝款の感じ、まなわくひから泣ける所。まなわく口の

廻りをズットふいてく(ない所……) 他人まり何簡單に  
説明し過ぎて居る。もし深く神秘的に人がどうと

こゝを待たかまものもうつて出来といふ風につけよ。君のは  
まるでとつてつたものか様。

感じを出さなければならぬ。肝心のどて感じを引き出す  
様に説明してつとと趣はまい。

四月廿八日

六月八日

浅薄ではいけない、中つと深く突っこんで、鷗が春書  
 を忘らわたり、鳴き私して居る、天日も鳴く飛ひ乱れ  
 居るではいけない。一つの群をはなれた鷗から情景が浮  
 き出す様に。リアルな感賞的なものを一つひかりかして  
 裏から見よ。歌とは違ふ。分らない、後は便はな、様  
言葉んか働きも。概念的、抽象的では  
 いけない。俳句は急に落ちる。題詠を感入んにやるやうに。  
 字生は大家のすること。

俳句割念よ。○牛の子の斑動くや柿若葉、水車  
 の句は狙ふ外かよ。水車高く若葉にかる飛沫乱  
 山花咲田水車下の分れ水 かうすれば位置かは  
 つきりする。之は一寸類のない、働しやれた句。

一休ん言ひ過ぎ居る。聯想ではいつて来るやう  
 工夫せよ。晴嵐や夢情と起つ草海、厭味だ。青嵐  
 や草を海の夢さめこと軽く、草海は自然性か  
 ない。草しと由空天井の土向嵐をうまがう。今から  
 こんな外ラシのない句を作つてはいけない。

吟行は其場で作るもの、主観と客観がごまか  
 しいとはけない。映画の批評でもかへつて来、二三日も  
 たつてくつきり記憶の中に機浮き上るものを山つて  
 記録す。西洋画の様は何もなし、昏かたのびなく  
 俳句は南画の様なもの、墨主繪の様なものがある。  
 小伎の繪かそうだ。人を描いて、目かたなかつたり。

耳が無かつたりする。じつと目を瞑る。これから  
此の室のものを描いて見給へ。

(僕を瞑る。左手の額に懶青楓の葉、姑の淡粉  
の繪、カラムが其の前にある。テーブルには切り  
の煙草入れ、朝顔形のセクラシヨシ模様の紅茶罍、  
右にはヒアノ、ウズオリン、セロ。中央にのんびりした俳  
趣を湛へた主人)

いあしの漁獲変動は海洋の化学成分の変化が  
ないか。食餌を移す。牧草を移す。移重する  
片羊の群のやうなものではないか。

生化学も君の方でやつて居る人はありませんが。  
微量の金属イオンが生物が生物には重要因子  
を示す。PHの血液中の変化。脳を刺激して  
心臓を速めどもくしたり。息が切れたりするのは、  
走ると酸素の消費が多くて炭酸の出来方が増え  
それが血液に溶け込むが、百万分の一の濃度の  
相違が、えなに聞く。スルホイオンの生物に及ぼす影響  
を調べた人もある。牡蠣心臓とZnを調べた人もある。

速語は分り易くして、無理に一定しない。

海の低溫、冬から夏につづくと、魚と稲作の関係

セシバツのは底に逆流があるが、

表面が皮流でうすく流れる為が、

決定するが、

其の早ル雲の空裏は、

十月十七日

上げ迄へ、よろこぶから。

二階の初室、先生 頸鬚、白混り跡々に並び、仰臥され

て居

薬は雨に濡れた芙蓉、烏似の寒か

隅に硝子越に貝える。椽側には瓶に押したコスモス。

僕のろう下げと来た懸崖の細菊、薄紫、青磁の

うつむけの鉢の上に置かれる。

「僕は野菊は好む。有難うねこいると花がよい。」

床の向には仙人草が空を降りる鶴を貝こいる軸の

下に黄菊、白菊の大輪が押しこめる。

「丁度ねこから一月、山登りなどは、<sup>たがが</sup>あつたの存恩

其の前が足首が痛む。沖至性しうマダだ。考へる本

はいないので讀めぬ。大衆雜誌のゴシヤノ欄のやうな

ところ。ちよつと流す切れるしのを流む位。夜分は痛む

ので安眠出来ぬ。脊椎骨が故障で、方々故障から

けになつたと、稍憔悴の色を見せられこぼる。

「最初用ふすればよかぬが、訪客があると下へ降りて

行つたか、いけなかつた。坪井君の念及具送りこんなものなら

行かなくもしよかぬに。床の傍にはスガキ、呼鈴、スリッパ

灰皿三所、茶吸のみ、薬瓶、軽く薄手の本、雑誌を救

十畳畳位の方間に主人一人。

「子規のは不治の病ときまつたが僕の<sup>機</sup>遣ひが、しかし

僕も此のやうなねこ子規の事を思ひました。しう

母静やうし。えいよりほかな、様だ。いろいろすれば。

することはあるか。それは僕は厭だ。

「君を、叮啷、手紙おこして来た。君たちの積に僕も来たが、何分此の様子で。」

「君も今のも（海洋）ずつとぶげゆけ。……これはよ。大にやり絵へ……」

「中谷君が十月、理研講演会に来る。長男は雪をやつて居る。やはり北大は北大で特色もつてわざと出来た、こゝをやつたかよ。」

「夏目先生が僕のをへらしたは二つ週位かつた。先生は余り人のうちを訪問するのは好きなかつた。」

「今度漱石全集が三版が出て定本になる。今と出なかつたのは、僕も出したなかつた手紙を思ひ切て出した。」

「数柑子など、今から買ると、世が浮くやうに耻しく思われぬ。」  
（しかし）華麗から枯淡へ、人の自然とせよと云ふ）

「さうかも知れぬ」  
「君はやつているか、一時も、落着いて結構だ。若い人は、さうのが一番いけない。……才能は十分ある。」

「僕が今迄、あつた人の中で、北原君は、産で一番えらい人と思つた。子規と北原は、えうかつた。其の中、随筆に、命、通俗、雅志、かいて見やう。空真があれは、送つてくれ給へ。」

北原君は、虚人、坦懐に、物を見る事、の出来

る人だつた。インサイトの卓れた人で、公平に物を考へる量風の大きな人であつた。今の俗物連とは違ふ。実に熱心で真面目、ど<sup>ん</sup>に<sup>ん</sup>迄も追及して、加減の事は許さぬちぢつた。岡村さんとは、いつも冷かしたり、強次つたりし態度だ。岡村さんは陽気、北原さんは陰性、まじまじふエグイ人、皮肉があつた。始めの會ふ時、たづの水産局のお役人と田舎の屋敷に根堀り葉堀り綿密に良く調べ居る。追及するに驚かすはえらいと思ふ。やんの角草分けする人はえらい。しかし、パンオキが長生した時は、藤よく後ものもの邪鬱になることがある。北原君は公平な人だからそれはなからう。

田内君しえう、エグイ人だ。北原君に似る。人間は先トボケタ所がある方がよい。もししへボゴでも打つと親しみかけるとよいが、聰明なる至思命令になつて上達せうとするのを自分で知れぬものかも知れぬ。

余り何もやらずにすむのだと、ニわかられる。俳句でやるといふか。どうか。Kは自分の都念のことはかり考へて居る。北原君は海洋調査をどうするやらねばならぬと確信して居る。自分の出世に妨げになるなと考へた。當時三人なことに没頭するのは、未も傷でなかつた。アカチニツクなツク者ぢやない。

自分は之をたづ面白く、田舎で自分の興味に

まかせ 学問して来た。何になろうのなんのと始から  
考へてはいなかつた。

帰らうとする。お嬢さんえをよんご

日本人の自然、敬しをとりよせられ万年筆

をとつて仰むきのまう、謹言、宇田君と

町亭に記された。これが自分の頂いた先生の

背出し、是れ後の筆の跡があつた。あう。

あう、敬え



昭和五年  
四月五日

「  
そんな譯の分らぬ馬鹿な事があるのか、  
何やつこいってやたよいか」

1.  
手向

大正十五年  
二月廿日  
宇田道隆様  
(牛込砂町三丁目)

寺田富彦様

御手紙難有う御免なさい。村の物理にはいつ居られると云ふのは  
同じでしかし隣村の物理にはいつ居られると云ふのは  
ちつとも知りません。僕は江戸の大川筋で所謂  
辰戸がすから小高坂の北町(は近方)です。

僕は一昨(は)から感冒で熱を出して寝て居ます。か  
大した事でもなさう。二三日もしたらよくなるかと思ひませ  
さうしたらいつでも遊びにお出なさい。夜たら大抵  
宅に居ます。たし適に不在の時上は御出なさい。御気の毒  
です。から御出になさる前に一寸電話で在否を確か  
め。からお出なさい。願ひます。宅の電話は小石川  
三〇九七 です。右御返る迄余は  
おあつ

宇田道隆様 大正十五年自三〇日

(牛込砂町三丁目)

(榎坂合)

御手紙難有う御免なさい。村の物理にはいつ居られると云ふのは  
同じでしかし隣村の物理にはいつ居られると云ふのは  
ちつとも知りません。僕は江戸の大川筋で所謂  
辰戸がすから小高坂の北町(は近方)です。  
僕は一昨(は)から感冒で熱を出して寝て居ます。か  
大した事でもなさう。二三日もしたらよくなるかと思ひませ  
さうしたらいつでも遊びにお出なさい。夜たら大抵  
宅に居ます。たし適に不在の時上は御出なさい。御気の毒  
です。から御出になさる前に一寸電話で在否を確か  
め。からお出なさい。願ひます。宅の電話は小石川  
三〇九七 です。右御返る迄余は  
おあつ

2.  
分



渡橋島船紀聯隊

昭和三年七月廿日

と子田様

寺田

御手紙有難う 結構いまいた、中々云々の御返事、お返し  
も托ぼしく存じますが、先づ朱橋君の理研に以て御返事  
難有う御返事いませ

少生尺八の論文は大学紀要第二十冊第十編  
となつて居ります。又東京数学物理学会誌に以て御返事

(一九〇六年)の沖田君に掲載が載つて居ります。此等の  
別刷があるのですか、是に於て二十二年以前のこと、何処へ  
行つたか分からず、さういふこと、併したるのことは、未だ

紀要の残本はある事と思ひます。頼んからぬ  
ると思ひます。もしくれば、定後方控銭を丸まら  
れます。お返事、さういふこと、併したるのことは、未だ  
専らに存じます

俳句面白くお見

田々りに乗らぬ日、さあ暑か

二は、少し月並しかし、近状であります。



行かたの何んとなくの感に居ます。何かの  
場合御遊法に在るに存じます。長男は少し月  
並の種怪衰弱の第三の試験全部放棄百ばか  
りに旅行したら又氣になすの四月を新にやり直して  
あります。此の新舊御遊法の仰花貝へ久し振に  
夕考りまいたる。岡村所長に會ひ大に同氏の抱  
負を聞かされたり。講習所と云れからあう。盛  
に在るると此ばかり思ひます。

あつて返る事と云う。ふれくつ自ぬを祈ります。

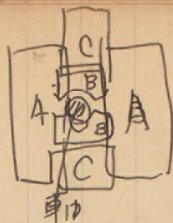
何れ示しの致し何れし。実情に面白く拜見。お  
御奮の為。決山に依りてお祈り致す。

全く万葉はよめはよむ。程面白き本。ふれかみ氏  
れをよめは思想問題。ふれは起るまい。くと思ひん

法政官射視  
宇田道隆氏  
五月七日夜  
寺の夜

今理研が帰宅食すし。から夕刊を讀むと第三師  
団に勅員令が下り。格高射砲第一聯隊も出師  
する。此を為見し。おれ君と戦争に出かける

のかしらと思ふ。不取敢比の干渉を書きます。  
さ。別に何し申上げる事。おれもか。う。御自衛の上御無事に  
任務を全うせらる。御執旋の。の。百。七。早。う。事。重。任。の。り。希望  
致します。出師の前。天。は。忙。し。る。男。ま。し。い。も。か。あ。う。う。と  
想像致します。か。す。く。も。御。大。見。見。家。の。め。め。大。う。願。望。を。  
おれ



山形川水色部東橋行

二十日君の御下

昭和二年八月廿日

寺向宮三郎

此手紙読有う、夫は失礼いたしました

貴の鳴り声の早速は洞の鐘有に聞きました

赤、青、白、黒の四つがあるから知らせを頼みます

大体の概念だけは知りませ

水橋の横の硝子板は、仕方がなからう大きな主要の

板 AA と軸の廻りを保つる BB と其の上下を繋ぐ

CC とに分け、AA と BB は同じだが CC だけを板組

の要に依りて作ればよいと思ひます。B と C とを薄く

硝子で作れば大した隙の隙はふとと思ひます。それ

B と C とは A の緑にビシッテ位で貼りつければよい

やう。B と C の間の隙の隙、又 B と C の間の隙の隙

を隙はニミリ位であつても大したるはふと思ひます。

まあサマッパツをなさい。

俳句結構と存じますか、はを研究して見ると色々研究

の余地があるやうです

「紅」は「白」と読むを、あの色は「白」べん色とは少し

感じが、とかいふが、まづから「紅」は「白」べん色とは少し

又「紅」の「白」は勿論此々の一番は「白」べん色とは少し

ではあります、少し隙といふ感じがします、或は「凌霄

の朱」に「やうげ」といふと、かと思つて、思ふに、これらも余り

感じしません、或は又「凌霄の朱」に「やうげ」も、青い風のやう

いふかも知れない、それだと意味が、すつと複雑になり

今日董か出来ふと思ひます、如何に、互他

凌宵の朱いぢやうく青嵐

……朱 携きけり ……

青嵐 凌宵の朱を 携かして

青嵐 …… 小 携きけり

凌宵や 梢の朱に 青海

凌宵や 梢の朱に 風流る

凌宵や 梢の朱を 風流る

凌宵の朱に 乱る風外

凌宵の朱に 緑に嵐外

凌宵の朱に 嵐に 練也

凌宵の朱に 亦まに 風ありて

此此此 御確究を

朱と青との対照は余り目立ち過ぎぬ故、青嵐  
いなきを 感じせし出しか、方よからんか、  
……

本御近丸の稿は所種山依 昭和四年三月廿日

宇田君 玉机下

寅彦

御病氣に 以て休みの申存、  
……

比はは木令の夜かまし、  
……

夜来甚多き御病氣に 御を  
……

研究の多し御病氣に 御を  
……

癒れ却るほるを 物理の  
……

方御 昼間云々のつ時の方  
……

の御へりん 理研へ御出で  
……

……



女部能成氏 昭和十五年十一月廿日 才一相互七階

傳

大学生の時 ホトトギスで マジリカ四と京 寺田さんの隨筆を  
不景氣な文學士が實のつとめ頃のまき 受けあしの懐から金を  
出してマジリカ四を かつた 誰かを誘ふを誘ふか(救石先生か僕に似てつとめを  
寺田さんはお救いの人 かつた人 かつた 救石先生とのうを

寺田君と云つて紹介されお辞儀した 葡萄美酒かきと其の

英後の名前か合意するが 寺田さんは 説を述べられた  
救石先生かごくあつた弟を幸かあつた 寺田さんは

隨分躊躇した 志慮いづく 思ひつて 奥多合意  
鏡子に成金のゆうち生活をし 欲しくおいと云ふ所 成金の  
ちゆうといふと 勝手いこくと云ふ。

寺田さん 其の輩は猫の大正二五年頃の弟子 小松  
サハリツヒん 知つてゐるのは小宮、小宮の力位か死んか片寺田さん

は山茶花の控様のつとめ 風呂敷を 盛るところ 草わりの  
こゝを色したのか氣い入らあつた 寺田さんと 待合行つたは小宮

は伯翁様と云つてました。 本館の銀香通りを此つとつた 碑の  
銀木の葉の早々葉の色くあるのも早教のりもある。上のう

だけ早く教もある 樹木に但性がある  
昔の文は 記録をいふとあつた(論文を發表しあつた)は  
プラトン は記録を 賤人を生きつゝ 誰か人君を 危んか

、おし書と云ふれあつたあつたは プラトンも 知ることはあつた  
根ののライカヤ、アリストテレスのやうあつた人かもし 記憶  
を残して呉れぬと惜しむ 寺田さんはマメん 書つて隨筆と  
かこつて

ナキ  
マメ  
ニ  
命  
ヲ

寺田文は ある意味でスベリアリスである。 科学者として

「スベリアリス」は事物と宇宙の普遍的な法則に結び  
連ねることを尊ぶのである。 二十一年アインシュタインの書にある

根本的であり、それはあかすかもしるあかす、小屋かけ物、  
といふ 非難をいふためのは 特殊と普遍と密接

に結び付けて話すことも多かつた。 其の關係が重大な  
随筆である。 アインシュタインの 科学者は其のやう

なニが地球の面をまわつて居ることを気が付かぬかつた。  
寺田文も考へた特殊と普遍が不思議に結びつた。

藝術術のうへに、トルストイはロシア人の民族性と人となりを  
強い個性を持つて居る。 寺田文の天才と藝術性は藝術

的、 信田文相の書にもその法則に接する気がし  
寺田文は 頭もすべり、心もすべり、又目もよかつた。

電車の中にもギリギリの本を平気でよめぬ  
英はもとめあつた、 傑作、 英はもとめあつた、 下120-130

エカタの物まきのま、 ラダ才体揚あやると 流杯  
へ書きたら、 僕を冷かしたといはれぬ。

頭の良い人は 甲冑が 要のいやうにすぬ。  
僕は 酒を呑むと思ひ、 邪まをき、 異性と

握手したくある。 そろそろ 求めた 相手、 ノー、 と言は  
れたことあり。 寺田文は、 三九か、 氣になつて仕うかあつた。

一方では、 羨み、 一方では、 羨み、 一方では、 羨み、



諸書は美分の転換かきま

Kebel 先生の  
Leben Künstler

映画も美分の転換に、僕も映画を見る者、後から

嫌が、声のやうに聞える。(山崎りすの気が知事の

二の七階から、銀花を道る人、をたそろか余程向

向い、(新令珍気のいふよ、  
夏子と、嫁入いかりと物造花のか、苗お箱

と、(寺沢田田の物、宛実物い、まをど

(西子まへ、こまをい、七ちんねん)

たうちおは、かついて、い、うは、たまの、お、お、お、お

を、お、お、お、お、お、お、お、お

岡田武松先生から汪々の書かれた

寺田先生は経済に専らまわっていたこと

レリーフに似た生涯

わかま、ぶつてん

小さいときから

顕微鏡でし

何でし、買つてみることも

隆平鑑計

たふ父親の気むづかしさで理財の念は所かつたこと

月給<sup>貸</sup>うつてそつくり奥さん<sup>に</sup>返して小遣いも余計にもつと

非常な得意になつた、月給をかくと小遣いもなくなるよ

印刷税のことも

書簡集

懐中日記、などにあつて

寺田先生と私

中学生 講演

郷土を何にしよう

山形私淑

大學生……夜分

七下ライト  
実験指導

地物改変

土佐 でおぼり  
カキ、生コヒ 持参

気象講演の恩

海洋物理 研究に指導

并後

俳句の手引を賜はる

下手な英文を飾らす

夜分お邪魔す  
日頃お世話

無限の事柄気長さは

承んせし、おなまようい思慕

俳句の  
研鳥おりの東多取 不自由所を云々  
御本等はどこかにある

東下合紙

俳句の指導ある旨を  
お礼の目録の傍に  
よからずお礼

寺田先生と俳句

寺田先生と御土——「お銀かつてお小もは

科学教育

科学

○寺田先生小伝

映画

寺田先生の随筆をか、おとぎと 科学的治初期の

相関

病気の関係

晩年は研究の

随筆の批評

精神的関係



苦勞性、の視性 — 崖芝の山登りや旅行に  
あらゆる可能性を考へて あらうかじめその水を生ける。  
そういうことも考へて見

(安部 純成)

寺田先生は人の世に生きることは結局恥を

かくることだ、という人生哲学の抱持が勢

恥をかかぬことだけに心を専注して、これは

自分のための作事でも、社会への貢献も決して

出来ぬといふ事、又恥を何家の形に益具作化と

例へば自分の研究を公表したり、自分の感傷を文章に

した結果、旧い皮をぬぎ、この恥を揚棄するといふ事

も多分持つべきであらうし

反省 <sup>はたがみ</sup> 恥 <sup>はたがみ</sup> 取 <sup>はたがみ</sup> 心 <sup>はたがみ</sup> や <sup>はたがみ</sup> ありと 著 <sup>はたがみ</sup> 人 <sup>はたがみ</sup> 確 <sup>はたがみ</sup> 勝 <sup>はたがみ</sup> 気 <sup>はたがみ</sup> <sup>はたがみ</sup> フ <sup>はたがみ</sup> ラ <sup>はたがみ</sup> イ <sup>はたがみ</sup> ド <sup>はたがみ</sup> ン <sup>はたがみ</sup> ン <sup>はたがみ</sup> 家 <sup>はたがみ</sup> 究 <sup>はたがみ</sup>

箱入鳥さし

(高 俊)

高橋  
俊夫  
（高橋）  
真の

「目下君は実に次がよか  
目下君は無暗に本を讀み、精選してよと思ふ  
のむけを充分に精讀すると、特徴がある。  
濫讀は破に頭を要する」

「学校の次のもよ、其は仕るの大いに好むし  
君に余り讀むなと云ふ僕の隨筆をうる  
換筆書だナ、どうも商賣は下手だ  
笑は  
比例せぬ

「現代生活の特徴は焦燥である」

「どうも僕は殊に僕物、理学者に之が烈しく様に  
思はれる、日かうしは居られんといふよ、年、中、世、は、  
のち、イラ、く、した、気分が見える。これは物理などは  
進歩が実に烈しいのにもよることで、銘々の奮闘  
努力はもとより結構な松なすが、一方に又心の  
甘着着まはあつて欲しい」

「醜い女といつても決してかうす迄皆醜いといふ事は

すくなく何れらうど、た美のモメントはあるものだ、  
往來の女の七分通りに物れるといふは一寸きと  
大層、浮気男の様態へるが見えらよ、こは  
其の分中々、美のモメントを捉へるが上手  
いはば美人鑑賞力が鋭いとも考へるし  
「どうも人間の美には厭味がかつてゐる草花の美は  
また、（いふ）



待色

勉強家は其の定まった職務に多くの時間を費す人である。怠惰者は職務以外の事に多くの時間を要する人である。勉強家は考へる暇がなく、怠惰者は働く暇がない。

繕

科学の理論が致す運した究極は昔の混沌に歸りは

しなやかといふ事になつた

クリストは人間に栄光をあたへたと同時に人間に侮辱をあたへた。アインシュタインも人間を最も偉大な学問の探究者として共に人間と生物に最大な侮辱をあたへた。二人共猶太人である。

死んで後もう一返生き返つて子供になれると假定したら

どうだろうといふ話をする。自分はもう人生は一度で澤山だと思ふ。尤も死にたくはない。死なぬのもつまらない。

自分に好意のみを有つて居ると信じ得られる人からの

手紙ほどうれしいものはない。しかも不愉快な時に来るのはなほさら嬉しい。

繪は時として自然より美しい。しかし自然は大抵の繪より

美しい。音楽は人工のものであるが、凡ての自然の音楽より美しい。ニッパ音楽といふもの、特別な價値がある。

色々やつて見てもやはり氣象の計算が最も面白い。一番面白い。

安眠

片

お

い

大正十年

十月十日 成城に帰る

歸途夕日を受けたる 武蔵野の光景を此迄なく美と思ふ  
鷹棲を此処に造りたしと思ふ

大正十年

日本で科学殊に物理学が驟目なのは学界の長老等の  
不見識による事多しと思ふ。流行のものどなければ  
物理でないように考へて居るやし。一昨日本が流行る  
頃にはもうそらく行つたりになる時分である。此を  
直つかける方が時代に遅れる。却つて一向流行る  
時代遅れのやうな事を平気でやつて居る之を新しい  
生面を切り開く余地はあるのである。

大正十年

十月十日

要するに今年は、数年来眠つて居た活力が眼を  
さまして来たやうな気がする。いつも元気がよく持が  
明るかつた。学校の念量でもいつも愉快に人  
が来ると、人の悪口などが氣にならなくなつた。  
さういふ自覚が更にさういふ傾向を強めた。此等の  
精神的变化に依るやうしく、教色がよくなり、  
教も少しはたつたと云ふ、自分でもさう考へる。  
要するにいくらが俗人になつたの、あつた、何時に  
月並になつたか、さうは思ひたくはない。

大正十年

芭蕉がしばらくも一処に定住する事が出来ず、に遍へして  
廻つたの持、自分の心持と何処か共通なものがあつた、氣

思ふ

かしてなまの、自分はじつと居たまひ、よく約像が味方せ  
かける強い誘惑に抵抗し切れず、又抵抗する気も、

コネンカの清泉八雲は、人を誘ふ風米のみま  
らず、何処か夏目先生に似たり、又山口が何れか自己似度

西洋のツボ齋の眼ばかりを、通して自然(を)見て居るのでは

日本の物理は、いづれまでも登攀したくない

Family のやうな人間が、世のもの毎である。大抵が、畢極  
を教へる処でなく、ツボ齋の仕方を教へる問の意味を、

せる処であればよい、本当の勉強は卒業後である。

歩き方さへ教へてやれば、卒業後に銘々の行き方、いふ(行く、  
歩く)ことを教へる、無闇に重荷ばかり負はせて、學生を

おしつゝしてしまふのは、宜しくない

一し  
なれ





Fancy がある Possibility を入る時、狭く之因れば般智事  
 だけから判断して其の Possibility を否せし、自分の女はぬ事柄  
 存たを解脫することは出来ぬ。實際に當つては  
 非常に新しき事実に當面し得べき、或令は此のやうに  
 常に因縁を科学者自身によつて、何れ取逃され未だ  
 かう、Fancy は若い頃に宿ることが多し、しかし頑迷な  
 老大家による大本流りかされてしまふ  
 大家ほど根本無用なものはない  
 Fancy は後、Nature といふ師匠があれば、  
 大家はもの知りである、  
 みんな Fancy 香をいの獲つて新しい Possibility の指をばらうと  
 持つてゐる

なんでもしけなすものは 科業よき人にはなれない  
 凡そこのもの、申からん金を取り出すにせよ、  
 此の意を味でつまらぬ本はない

人の事はばかり気にする人がある、これは  
 自分の生活の充實しないことを 心配する

専門の業問だけ(か)にせよものは、  
 栄養だけ取つてゐるようすものがある

事柄

また

こと

所謂

品行方正にして品行方正以外に *virtue* (徳性) は  
たゞ思つて居るやうな人は、他人の情に  
強い興味をもつて根柢が葉はり耳きたり  
又人の前で喋つたがる。此れは明か<sup>に</sup>種<sup>の</sup>  
性慾の變化的満足である。

連句は虚と実の交錯による *mehr-dimensional* にある。  
個性の相違によつても同様である。従つて独吟は  
成効しない又余り大勢でも統一がなまる。

*Nature* は「無学文盲なものである。学者がたかしの  
計算をした結果或現象の「不可能」を証明して  
「自然はこれを無視して平気で「不可能」を實現する

日本には本当の意味のオリヂナルリサーチが乏しい

新し、問題をありふれた方法で追究するのは  
尊重され、古い問題を新し、眼で見直さうと  
する努力は軽視され或はむしろ誹謗される

得意な事はやさしくつまらなく見える場合が多々  
何れも *minimum* *resistance* の道を通るが自分のためにも人の  
ためにも *Wise* である。此れに及するのは不自然な *Vanity* である。

學者の価値は仕事ある。大坂えうごふをいふ評判  
だけど何もしないものは決局何も出来ないと云はれども仕  
事がない。実証もないものは科学者の眼には存在しては  
同様である。  
仕事をするのは學者の義務である。さうしない  
のに學者の地位を塞いで居るのは世を躊躇するもので  
ある。

仕事をしよ見ると實際自分の無力が分り、分る  
つもりの事が実は少しも分つて居ない事が分る。  
論文を書きかけを見ると研究の穴が分かる。それ  
だから論文を書きかけは事は仕事を完成する  
手段であり、勉学の必須方法である。

俳句の特徴は「取り合せ」モンタージュである。

時鳥声橋ふや水の上と白露路松江を比べても、  
又西洋の詩を見ても分かる。二つの必然の区別なきもの、  
モンタージュによつて具體的な一幅を作る。

連句の附句はかういふ取合せが過剰といはれない。  
それだ俳句は一つの小歌仙と見れば可なりは長い  
発句とも見られる。 五七五には縁があるといはれない。

不易流行は俳句に限らず凡そその文の表現に apply  
科学研究の道徳も同様である。同じ精神もあつた着物を着る。

俳諧の根本義は montage cutting である

俳諧は結局 諧ひものである

風雅の心の自由は一面に於て 此を前に自己を 静敬する 殺首の傾吐とも通じる

未来の俳諧・連句の復活、万葉的・近世の 積核分子ある風雅道の発光、俳諧・老荘・儒教の 外に西歐文化を取り入れるは未来の天は無の心である

俳句は連句の圧縮であり、連句は俳句の テレメクスである 蕪蕪味の「テロメクス」は「句」の さいしかり 郷の句の 群像 世化である

俳句は、俳句は、かりするから、今の俳句は進歩 する苦者である。俳句は連句の圧縮である。連俳は数々の 体験である。

色々な疑問を起す、えんをもちうつける、読書 中々又自然にふしと 答を見出す愉快

釣をたくえ、魚の、愉快、釣をせぬな、人は魚はからぬ。

物理学は存外物理的現象に興味のある人が多く、余り 興味がないと横をすといつて中々先される

徳中日記

科目は五官からの解放といふ。併し五官なしに科は成きぬ。五官はあらゆる tool の最精巧なもの。併し心魂との交感があるめに教養や鑑賞を生じる。しかし分析的研究と練習の理的効果も、  
最上の利器とならう。 *emanation* されは

人によつて五官の差のあるのは仕方がない。金の  
ある人となし人。天才と不天才と。仕方の能なり  
ちがつてもそれは仕方がない。

自分の欠点を知る人は割に多し。しかし自分の美点  
知る人はない。知ると同時に美点なくなる。

十月廿四日 水産試験場行 秋雨畑る勝鬨の海

港河情緒 船夫小屋の燈也

親は子供に教育される美點もある

公主体を以てせなければ 虚、實は分らない、  
他人の姿を以てする人は 金筋を示さなければならぬ。

科学は 理屈より data

分らない文章に二種ある。何を云はんと居るかが分らない  
のと云はんとする事は分るがその事が分らないのと二つである。

は  
。学界の若い現役を多く集め老朽の巨頭をすま

。学者の病 焦燥病 宣付病 癡張病 濁癪病  
癡表出怖症

地震現象の全体的把握研究を心がける。毎かある。  
部分的の原因結果追究はいたちうの vicious circle なる現象

人間は自然に養はれ教育されて来たものだが、結局  
(日本の自然) 教は日本の自然界の特殊性がすべてこの  
特殊性の第一決ををまいたつてある。

ふき、  
とある。

先生と語して居れば小春哉

先生と対ひてあれば腹立ち世とも思はず小春の日向

夏目先生…もつともすぐれた才能を持ち、えして

もつとも暖かい心を持ちた偉大な人

ごくまじめな嚴格者がたゞはなれず、しかし

ごくやさしい、素直な、おもしろやりの深い

ちやうど春のよ様な暖かい持の念があった

弟子たちと対して全く弟に對する、こころしめであった

時に此りもするといふことはあつてもよく打ち立て

そとあんなまで、大なり世流するといふ風がある

決して我を通すのすねたのと、方ではな、あな

不愉快なことがあつて、心のやり場がなくなる

をりには、さつと先生の所へ来る、こころすると

たゞもう先生とむきあつて大はかりで、それかもう

充令に尉められる。先生はそんな場合も

又、この時して、おもしろやうなるや、おためし

まなどは少しも云はれないうちである。

別に尉めらるやうなるをいはれるは、充令に

この思ひや、せうけることが来るよくなきとする。

こうして先生の前へ出る、兼て、自己は、

よい人になつた、持となる、かくも先生の前へ出るには

子供のト  
門下生  
物言わぬ  
罪人  
常に  
を以て  
其代  
技巧の  
敵意也  
対して



更に力強く美しくなつたのは当然であらう。  
又並にあのやうな文章を作つたのは俳句や詩が立派  
であるのは当然かも知れない。先生のやま  
句も作り繕う人になければ先生の傑作は  
出来さうしな。あれは作位を作り繕う人にな  
ければあのやうな句は作れさうしな。

先生は一面非常に熱情をやうでもあつたが、  
また一面には実に素直に人の云ふ事を受け容れる  
好む節らしいところもあつた。

先生からは色々なものを教へられた。俳句  
の技巧を教へたといふだけにはなほ、自然の  
美しさを自分自身の眼で見出すことを教へた。  
同じやうに又、人間の心の中の真なるものと偽なる  
ものとの見分け、さうして真なるものを愛し  
偽なるものを憎むべきことを教へられた。

色々な不幸のゆゑに心が重くなることを先生  
に會つて話せし居ると心の重荷がいつの間にか  
軽くなる。不平や憤悶のゆゑに心の暗くなつた  
時に先生と相対し居ると、さういふ人の黒雲が作  
麗に吹き拂はれ、新しい気分が自分の仕舞を  
注ぐニよと出された。

先生といふものの存在。このしりかんの釋となり。医藥となるのじあつた。

五言「雲も雪も」  
俳句とは「トソク」の煎じきめなしのあり。

先輩は「鑑の冥月」  
三四郎の「野々宮さん」  
「集法」と「指摘」

「修善寺女」  
後の俳句  
「夜が散つて雪のやうな」  
「世の中を」

最後の大事に「とき同じ病気が、こたは」



ロマン

つまらないととう人はつまらない能力のなり人である。

一つの石ころにも世界が含まれている。それが  
見えないうのは見たくない人が盲目である。

狸の腹鼓み

風の音、CS.S. 高窓に特別な温度風の分岐の音、  
遠くの鼓みや太鼓など音などが聞える。それが遠くために少し  
音色のちがって聞えるので、聞入の心の中は何とも引寄せ感じを覚える。  
いつまでも覚えている。

(昔の墨筆は)

音の厚み

飛行機と人間の未来

毎日空を飛んで歩くようになったらどうであろう。  
人間の心がいくらかき分けられるものになりはしまいか？

羽衣と空のなう

空のなう

世界中一つの玉になつて、あらゆる人種が入り乱れる

イスラエルの教

よくな世界に段々近づくのにはあるまいか？  
何十年のちがはろる年の後だが、それは知らない。

本質的の  
世界後の  
一歩

しかしそういう日か、は来ると思ればその前  
飛行機や飛行船かもつとく健康しなればなうな  
（空がま）

人間の心のお医者しす。この人間がみなおなじ者だと  
思つてはいけない場合があると思ふ。

原子が集つて分子になり、分子が集つて去日明やコイルができて

これが集つて生物ができる。クロモソの粒がまゐる。それから  
生物の色々な個性が生れる。このようなことはまだ大きな謎である。

偶然"というものの関係と来る現象

金米糖、箸券、スゴ六  
群拂いの行方

首を吊つてぶらさがれば身長はたしかにのびる。しかし、いかにまっ

限られた条件の下に限られた時と場所の範囲でした実験の結果、  
を何の条件もなしに手放して応用することはおそろしい

女の子生れしと聞きて  
明治三十四年 五月廿六日

六月男  
幸ありて桃の若葉と照り映えよ  
花ならば如子の花に似たるべく

大正六年 十月廿七日  
相違なく  
解れぬと見れど、唯つめたさの小袖かな

大正六年に安本をまさり暮すも 癖のうち

勤強家は其人の定まらぬ職務に多量の時間を費す人である。  
為情者は職務以外のことに多量の時間を費す人である。  
勤強家は前者の癖がなく、為情者は後者の癖がある。

物事に対して「ツマライ」と云ふのは「自分は其物事  
の中にツマル或物を発見する能力を持たない」と自白する  
也

大正九年

八月九日

(田舎者) 静養をなほ快愈せざる場合彼の海洋救済所

へ行く気はあかとの話あり。夜色を前途を考へ眠れず

三時過就寝

沖戸へ行く事の不利益

- 一、夏暑からからだに不利
- 一、大業がなくとも完全なる圖書なく又地西醫科といふ
- 一、刺戟がなくとも頭が沈滞する、眼界が狭くなる
- 一、彼の教育向上のゆるいこと
- 一、コレラ(スト)の流行多き
- 一、良い医師が乏しく一方の場合不安

八月十日

夜 (書き)

雑の者はないと考へて眠れなかつた。つまりみんなが自分

以て此の向きでは見込が少い。なぜ余計な人の世話ばかり

焼かなど勉強しないだらう。情ない心持がある。胃袋の辺

集活す。やうに感ぜられた。二時過やつとぬた。

九月二日

小宮氏宛書簡

沖の造つた万物の中で一番失敗の作は人間が

という事がある。沖様が後悔して持て余して居る。わうな気がした。君はそれを氣のあるはありさうな。

外人の仕るなう少々まづとも採用し、日本人の仕るだ  
九分迄よくとも、あと一分の欠点を拡大し、一体を採却  
しやうとする。此れが日本の学者のケチなる見である。

(オ六巻の断片)

載る問題に對して「ドレモイ」と云ふ解決法  
のある事に氣の付かぬ人がある。何事も唯一つが  
正しい道がないと思つて居るからである。  
「ドレモイ」といふ事は勿論しも無責任といふるを  
意味するのではない。

通説の物  
土岐義隆  
が先を  
らん作  
とつて  
多た  
を早  
若し先生  
今まで  
長生さん  
とられたら

戦時に  
軍は先生  
の示唆  
創案  
指導を  
戦術には

相互に効きつゝある二つの系の力学の矛盾は相  
対率による解決された。異なる人生觀を有する人  
間の間の融和は愛と同情による外はない。  
「邪道」といふ言葉は頭腦の古い人が新しい人の  
捉へた上眞理に名づけるものである。

連句の附句の妙諦は自己を捨て、自己を  
棄かするにある。前句の世界に身を沈め、其底  
から何物をか扣んで浮上つて来る。自分の世界が閉塞する  
前句の表面に現れたものだけなら、思ひ付いた考を何処か  
執着するのは到底い、附句は言葉でない

これは  
ゆるい  
失人  
同僚  
他の  
いつ  
あこ  
相手  
指導  
下

其意  
は  
あ  
ら  
ず  
い  
ふ  
と  
も

相  
人  
の  
い  
ふ  
の

い  
ふ  
も  
と

法  
一  
つ  
が  
唯

却  
却  
の  
あ  
る  
の  
だ  
と

これはあら  
ゆる対人句は  
失人  
同僚友人等  
他の某後  
いふこと  
あてはまる  
相手役  
指導役  
下役

前句が假令まづくても平凡でも、それにつける附方  
次第で前句がぐつと活きて引立つて来る。  
此れは前句がどんなものでも其句の底には  
色々な可能性が包まれて居る。それを反付け出す  
のが仕事である。併しそれをすれば矢張り前句に  
充分な理解がなければならぬ。  
又前句をつけた人の心持に同情がなければならぬ。  
これが出来るためには矢張り人間が出来て居なければ駄目  
である。







葛谷 祖矢智の信

少しづつ「学問」してすぐ「生意気」になる 世はがやが

→ 自然と「生意気」になる  
（生意気）

僅はいつ如何なる時にも人は人としての  
燃えている。たとえ世の中の誰が何と云おうと  
自分の信ずることを物 扱わずに「量」が在る

東大 文学部  
博士 学位 取得  
文学博士

春日 義文の印象  
人格 景慕

一月の生命 他人の自らの内容を咀嚼して  
交感比を五十七年

研究の  
外心の  
純粋な  
物としての

創造

— 独創

暗示 判別

何事でも容易に信じて代り又疑いもいふことも容易に信じて  
47年

単純な理性で割りきれぬもの 尊厳  
(神)

物を吃する力 47年

言→

言葉

葛谷

1956年

カズキ

ベルン

マレー

→ 言語学

研究

— 誰の話でもどん存る柄でもさあ愉快に聞かれ 其中の一番面白い  
所をすじつかんで合つて、もう大なり意見のなかへ  
いれよう、よい気分を ついてまで長居し

たしなむ玉 一い清 研問室 鏡收のてす  
大河内白飯

國書に 参考書や 雑記の  
著者の人なす 似たり研究せしがた

研究の手

実験の成果が「文献」など調べた何かある。手紙を  
暇めに何時までも考え見給ふ。何が来るよ」といふ。

湯川さん  
お茶の多分

たまたま暇に考えは 今日はいい考へがでなければ  
後いって来る。目がさめたら又考える。毎日11にど  
りかえす。 考へが来る

「アラテ」 — 左様  
「レリー」 — せし。 考へる  
「レオナルド・ダ・ヴィンチ」 } 宇宙の  
「ゲーテ」 } 現象の物語

朝 洗る所 全ダイの水

庭の 椿の花の散らさず。 藤の葉のはじけさず。  
ふんトビの餌をわらす。 おキスの取す。

街で 電車お 同の後靴は、 人間の往来の足跡。  
言葉のたかり、 会南 故さの 窓ガラスの 刺月々

寺の全集科学篇より

特に割目現象を取扱ふ新しい力学の派の発展する  
可能性を断言する。これは普通の力学の数学理論から

純実験的統計的予測より甚く物数学の進歩  
著しい弾性曲線理論、同様の現象の分子論

統計的不確然より表れるべきは無力である

mechanical  
system

の後は均場力の力の不連続の出現を決定する  
生物学的現象の初期は主に熱力学の側より見掛

矛盾性による

物理的現象は割目也

creases

は不連続かエネルギーの

localization

自発的に見掛上一様な場中なれる、均場の物質、エネルギーの分布  
無から有が生れるのである

differentiated  
structure